

善隣

No.494 通巻761

2018年（平成30年）8月1日発行（毎月1日発行）

2018

8



「東京湾クルージング見学会」(6月28日): 竹芝小型船ターミナルにて



平成30年度常任委員会 委員長・副委員長・委員名簿

○環境委員会(12名)

委員長 牛木久雄

副委員長 姜晋如

委員 伊大知重男 神原 達

清原徹二 澤村 宏

中村陽子 橋本公佑

原田克子 藤木英夫

星野一文 村瀬 廣

○国際交流委員会(15名)

委員長 姜晋如

副委員長 八島継男

委員 岡田 実 岡部 滋

近藤直利 佐瀬 恒

高嶋正文 高橋 昇

原田克子 日野正子

福島靖男 藤沼弘一

村瀬 廣 村田嘉明

矢野一彌

○講演委員会(17名)

委員長 古閑 哲

副委員長 日野正子 西 忠雄

委員 石飛 仁 井出亜夫

戌亥芳秀 牛木久雄

北野雅教 清原徹二

杉山秀子 高橋 昇

○広報委員会(11名)

委員長 原田克子

副委員長 藤沼弘一

委員 朝 浩之 伊大知重男

岡部 滋 姜晋如

瀬崎 明 鶴留エマ

村田嘉明 矢野一彌

○東北委員会(12名)

委員長 戌亥芳秀

副委員長 佐瀬 恒

委員 加藤紘捷 近藤直利

新宅久夫 神保 達

瀬崎 明 塚原美津子

寺西修司 野木信洋

藤沼弘一 森 淳

○財政委員会(10名)

委員長 矢野一彌

副委員長 岡部 滋

委員 井出亜夫 戌亥芳秀

古閑 哲 近藤直利

清水與二 瀬崎 明

日野正子 藤沼弘一

善 隣 目 次 2018年 8 月号

公開講演会記録

現下の国際情勢	
—難しい時代になってきた昨今の世界を読みとく……瀬戸岡 紘	2
激変する北東アジアと中国	
—金正恩は「170度の転換」をした ……………朱 建榮	11
東京幻視芸能考 ……………石飛 仁	19
俳句の縁 ……………大内善一	27
中国ウォッチング ……………編・訳 上松玲子	28
コラム 〈腰折れ文〉 十二、……………渡邊澄子	30
陶々俳壇 ……………馬場由紀子選／長野宏太郎	31
協会通信・同好会だより ……………	32
2018年 8月の行事予定 ……………	33

みんなの写真館 ……………	32
---------------	----

善 隣 第494号 通巻761号

2018 (平成30) 年 8 月 1 日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋 1-5-5

一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03 (3573) 3051

FAX 03 (3573) 1783

発行人 矢野一彌

印刷所 (旬)ゆにおんプレス

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

平成30年度常任委員会 委員長・
副委員長・委員名簿……………表 2

公開講演会記録

現下の国際情勢

——難しい時代になってきた昨今の世界を読みとく

駒澤大学名誉教授 瀬戸岡 紘



1. 難しい時代になってきた昨今の世界——いま大切なことは、それを読み解く力

近年、従来の定説や理論的枠組みでは説明できないことが多発するようになりました。たとえば、イギリスのヨーロッパ連合（EU）離脱決定、ヨーロッパ各国でのEUへの反発の拡大、そして右翼の台頭、ヨーロッパ各地の分離・独立運動など。ナチズムやファシズムへの反省や警戒感は後退しているかに見えます。

アメリカでは、トランプ大統領に、一方で強い反感がありながらも、他方では依然として強い期待があります。プーチンやシー・チンピン（習近平）は、独裁

体制にも見える権力基盤をつくりだしました。米・欧の自国中心主義、ロシアの大国志向、中国の外延的拡大路線などは、近い将来、激突することはないのか？ そのさい、核兵器は使用されてしまうのか？

問題は、このような表層だけにあるものではありません。経済活動の基本は生産にあったはずでしたが、いまや生産は低賃金労働者（あるいは外国人労働者）の仕事と見下され、昔は卑しいとされた者がこそそこを行っていた金融が経済の前面にでて、全面展開しています。人心を最終的に捉えるものは、真実であり、正義であり、科学的に正しいことだったはずでしたが、いまや、偽情報（fake news）であり、扇動（かつてヒトラーが得意）

になってきたかに見えます。ブッダやキリストやムハンマドに帰依しようとした人々がいた古代と比して、現代を発達した社会と呼べるのか、それとも墮落した社会と呼ぶべきなのか？ 一言にして、現在は、終末期社会の特徴がぞろぞろと立ち現れている時代といえます。

そういう時代は、従来の比較的安定した時代の教科書的な見方・考え方で理解しようとする、間違える恐れがあります。大切なことは、学問分野的にも、歴史的にも、圧倒的に壮大な視野をもって、新しい事象を捉えること、さしあたり、そのような視野を獲得するためにどのような勉強をすべきか、そのすべを獲得することです。

2. 近代の政治理念と資本主義の経済原理——相容れない二つの要素

ヨーロッパに始まった近代という時代は、理念(理想とすべき考え方)をもって始まった点で、他の時代(原始時代、古代、中世など)と異なります。近代の理念(政治理念)は、もちろん一気に生まれたものではなく、次第に多くの人々の心を捉えつつ、確立されていったものですが、それを一言にしていると、つぎのようになります。

「一人ひとり自立した個人が、相互に対等な立場で、緩やかな繋がりをもった社会を形成する」こと。

ここでいう、自立した個人とは、「自分で考え、自分(の意思)で行動し、(問題があれば)自分で責任をとることのできる人」のことです。近代の黎明期に、ダンテ、ボッカチオ、ペトラルカ、あるいは、ラファエロ、ミケランジェロ、レオナルド・ダヴィンチなどが、文学や芸術作品で表現しようとしたものは、ことごとく、そういう自立した個人のことでした。そんな自立した個人のことを「近代的個人」といいます。近代社会は、

近代的個人があつてこそ存立可能な社会で、近代の政治理念も、近代的個人が形成すべき社会を定式化したものといえます(もっとも、そのような文書が残されているわけではありません)。

近代の政治理念は、ルネッサンス期に芽生えはじめ、宗教改革運動(表向きは宗教論争の形をとって、150年間にわたり、全ヨーロッパを巻きこんだ一大政治闘争)のなかで鍛錬され、啓蒙思想として一貫性・整合性をもった思想体系にまとめあげられ、市民革命をおして実現がはかられました。それは、フランス革命のスローガン(「リベルテ(自由)」「エガリテ(平等)」「フラテルニテ(社会的絆)」)にもなり、「トリコロール(三色旗)」に象徴化されたものでもありました。

しかし近代は、ほどなく、もうひとつ異質の原理をも内包する社会として展開することになりました。その原理とは、利潤動機に促進されながら急成長する資本主義の経済原理です。この原理の下では、成功者が富を蓄積する一方で、収入を得るためには事実上「自由」を奪われた状態で黙々と生きる人々がたくさん生まれ、人々のあいだに平等は消滅、社会的絆も失われてしまします。

近代社会とは、一定の安定した社会でなければ全面開花しえない「近代の政治理念」と、利潤動機に促進されながら社会を急変させていく「資本主義の経済原理」という、相容れない二つの要素で構成されている社会なのです。それゆえ、近代以前のどの社会と比較しても、問題が生じやすく、ひとたび問題が生じると大変こじれやすい社会なのです。

近代のあらゆる政治経済問題の基本は、この一点にあります。

3. さらになる発展のためには、それまでの発展の成果のリセットが必要

ところで、資本主義の経済原理は、近代の政治理念が機能するようになってから生まれ、展開するようになったものでした。しかし、資本主義の急激な発展は、近代の政治理念はおろか、自らの経済原理さえ破壊してしまいかねないほど強烈なものです。いわば、資本主義は非常に毒性の強い経済システムなのです。

それでは、資本主義の発展のなかで、その経済原理の運動の余地を残しつつ、さらに成長し、しかも近代の政治理念の惨殺を食い止めつつ発展するためには、

どうしたらよいのか？ 答えは、発展の成果を、随時、リセット（帳消し）することです。

そもそも、発展とは何か？ 発展とは「原形を崩すこと」です。それは、大きなこと、高くなること、広がること……が本質ではありません。原形を崩すから、大きくなること、高くなること、広がることも可能になるのです。

分かりやすいえば、発展とは、もともと外枠にピッタリ収まっていた内容物が、次第に収まらなくなっていくこと、すなわち「不変の外形（たとえば「資本主義経済」という形）と可変の内実（たとえば資本主義経済を機能不全に追い込みかねないほどの不変の生産）」とが次第に同居できなくなることを、一言にして「矛盾の拡大」のことなのです。

だから、発展（とりわけ急速な発展）は、それをつづけようとするかぎり、そのシステムの成果の帳消し、またはリセットを、随時、しなければならぬのです。つまり、発展の結果の帳消しを、繰り返かえし、やっていないと、当該システムはその本来の形を保持できなくなるので、本来の原型に立ち戻ることが、同じような運動の継続を可能にするのです。

4. 資本主義経済のもとのリセット——ネグティブ

資本主義経済におけるリセットには、3つのレベルがあります。第1は、サイクル（循環＝景気循環 business cycle、または恐慌循環）をとおして、生産と蓄積の成果を、約10年単位でリセットすること。第2は、レジーム（蓄積体制 regime d'accumulation）を、数十年ごとに更新することをもって、古い経済と社会の在り方を一新すること。しかし、それも効力がないばあい、第3に、人類社会を保全するためには、資本主義のシステムさえも破壊してしまうという、究極のリセット。

まず、サイクル（循環）には、3つ、ないし4つが指摘されています。キッチン（Kitchen）循環、ジュグラー（Juglar）循環、コンドラーチェフ（Kondratyev）循環、（さらに後者2つの中間に位置づけられるものとしてクズネツ循環）がそれです。これらのうち、資本主義の発展過程で定期的に不可避となる生産と蓄積のリセットを説明するうえで最も有効な循環となると、ジュグラー循環をいってほかにありません。最近の例を見ると、

1987年、1997年、2007年を起点とする経済恐慌があります。みごとに10年ごとに起こっており、それぞれ「ブラック・マンデー」、「アジア通貨危機」、「リーマン・ショック」などの大混乱の引き金を引いた恐慌でした。

やや注目したのは、2017年。この年が多少とも静かだったことは、あとでいっそう大きな恐慌が襲ってくることを予言しているのかもしれない。恐慌のサイクルに注目することは、資本主義の最も奥深い本質を覗き見つつ、将来を予測することでもあるといえてよいでしょう。

「レジーム」という考え方は、フランスのレギュラシオン学派、アメリカのSSA学派や政治学者グリーンバークなどが重用した概念です。この考え方によると、一口に「資本主義」といっても、国により、時代により、その様相や政府のとする政策の在り方は異なるもので、生産や蓄積が行きづまっても、たとえば大恐慌に直面したとき「ニューディール政策」を実施したなど、政策や社会の在り方を大きく変更すれば、資本主義は生気を回復するというわけです。日本についても、戦後改革は、行きづまった明治以来の日本資本主義に新たな活路を拓きました。生産と蓄積のレジームの大胆な変更は、

恐慌による定期的なりセットでは解消しきれない問題を解決できるかもしれない、というわけです。

しかし、生産と蓄積のレジームを変更するということは、大きな社会的抵抗に遭遇します。現在、世界のどこの国でも「抜本的な改革の必要」が叫ばれているが、ほとんど改革できないでいることが何よりの証です。日本についても、70年以上まえの敗戦という大きな痛みを受けて、ようやく明治維新以来のレジームの変更ができたのです。

ところで、システムとは、一つひとつの部分（パーツ）は特定のことしかできなくても、そういうものが集合して、有機的な連携プレイがとれるようになったとき、大きな働きが可能になる、そんな全体をいいます。コンピュータは立派なシステムですし、人間の体もきわめて精巧にできたシステムです。じつは、近代の資本主義世界も壮大なシステムだと説いたのは、アメリカのウォーラーステインでした。

恐慌のサイクルでは解決できない資本主義の矛盾、それが生産と蓄積のレジームを更新しても解消できない、となったとき、あとはシステム（近代資本主義の世界システム）の崩壊あるのみです。それ

は、たとえば人間が、働いて疲れると眠りにつき（周期的な睡眠のサイクル）、その繰り返しでは身体の異常が回復できなくなると手術などの抜本的治療を施し（レジームの変更に相当）、それでも回復しないと死に至る（人体というシステムの崩壊）、ということに似ています。

5. なぜトランプへの期待が高いのか？——アメリカ史をとおして考える

さて、以上のことを前提として、以下では、アメリカ、ヨーロッパ、中国の現下の事情を見ていきましょう（紙幅の都合上、朝鮮半島、中東情勢、などについては別の機会で）。

アメリカでは、これまでの基本姿勢を一変させた自国中心主義的態度ばかりでなく、フェイクニュース問題で世界を騒がせるような人物が大統領になり、一方で強烈な批判や嫌悪感を集めながらも、他方では依然として強い支持を受けるといふ、ひと昔まえなら考えられないような事態が起こっています。この現象を、どう解釈するか？ リンカーン以降のアメリカ経済の急激な発展を見れば分かります。

アメリカでは、南北戦争終結後、産業革命が起こり、資本主義は急激に発展します（アメリカ資本主義発展の第1段階）。1929年にはアメリカ発の世界恐慌がこの国を大混乱に陥れますが、ニューディール政策とその後のケインズ主義政策をとおして、むしろ資本主義はさらにいっそう発展します（アメリカ資本主義発展の第2段階）。その後、それらの政策も次第に効力を失いますが、金融活動のグローバル化によって、ウォール街の金融業者たちは莫大な利益を上げるようになります（アメリカ資本主義発展の第3段階）。ところが、気がつけば、経済活動の基礎であるべき「生産」、とりわけ「アメリカ人による生産活動」が消滅し、アメリカの「普通の人」たちは置き去りにされていたのでした。

アメリカは、もともとプロテスタントが建国した国であり、宗教改革のなかで鍛錬された啓蒙思想が建国の理念の核心（メイフラワー精神）となった国であり、その意味で、近代の政治理念そのものが体現された国でした（『独立宣言書』、『憲法』に明文化）。そこでは、自立した諸個人が、対等な立場で、緩やかに結合する社会を建設することが、市民全体の願いとなりました。

ちなみに、そのことを小説化・テレビドラマ化したものが『大草原の小さな家——インガルス一家の物語』でした。そのテレビ放送（1970～80年代）は、アメリカ市民に圧倒的な郷愁を喚起したものでした。

そのことに照らしてみると、生産活動が低迷し、ウォール街の金融業者たちだけが元気でいるような現在のアメリカは、建国の理念に描かれたアメリカの理想からの大きな逸脱のほかの何ものでもありません（インガルス一家のような生活スタイルは、すっかり消滅！）。

そこで出てきた要求が、「建国の理念が生きていたころのアメリカに戻して（リセットして）くれ！」「無限の経済成長が約束されていたころのアメリカに戻して（リセットして）くれ！」「外国系企業や移民（労働者）は排除してくれ！」「外国との煩わしい関係はキャンセルして、アメリカを大事にしてくれ！」「いまのアメリカでは『自分で…』といっても何もできないが、もとのアメリカに戻してくれば、あとは自分（たち）でやる（＝理念とおりのアメリカを再建する——じつは、ここにアメリカ市民魂がある）」などというものです。アメリカ経済の停滞がつづき、成長への焦りが募

れば募るほど、それらの意見は勢いを増しているのです。

たとえば、「いまさらインガルス一家の物語の時代のようなアメリカに戻すことは無理ではないか」と問われれば、アメリカ市民は「いえ、あの男（トランプ）ほど滅茶苦茶なヤツならやるだろう」とか「むしろ、あれくらいヤツでなければ、できないだろう」などと答えかねない勢いです。

要約すると、アメリカ市民の要求は、「アメリカ建国以来の社会システムを守るために、現在の腐敗した蓄積のレジームを、思い切って、大胆に、リセットしてくれ」ということになります。そのことが、一見したところ乱暴そうに見えるトランプが支持をつないでいる理由なのです。トランプを支持するアメリカ市民は、墮落した市民ではなく、したたかにも健全さを保持している市民なのです。

6. ヨーロッパにおける自国中心主義——ウェストファールン体制への回顧

では、ブレグジット（イギリスのEU離脱）、EU加盟各国での反EU運動、ヨーロッパの右傾化傾向、ファシズム復

活、各地の分離・独立運動などは、いままなず、起こっているのでしょうか？ この理解のポイントは、近代ヨーロッパにおける理念としての「近代的国際関係論」にあります。

この「近代的国際関係」を目指した闘争は、「三十年戦争」（1618～1648年）でした。それは、ヨーロッパ人が第一次世界大戦以前に体験した戦争としては最大の戦争で、表向きは宗教戦争の形をとっていたものの、近代的市民社会を目指す人々とカトリック的世界や中世ヨーロッパ共同体を護持しようとする人たちとの決死の闘争でした。したがって、この戦争では、「近代的諸個人のつくる社会」が、「近代的諸国家の国際関係」と次元を変えて、その実現か、それとも阻止か、が闘われたのでした。

ここで問題とされた「近代的国際関係」とは、「自国民が決定し、自国民で行動し、自国で責任をとる諸国が、相互に対等な立場で、緩やかに連合する」というものでした。こういう国際社会では、まずは、各民族が独立して、それぞれの民族国家（国民国家 nation state）を形成するのがよい、ということになります。それは、ローマに本拠をおくカトリック教会が全ヨーロッパを一元的に支配して

きた従来のあり方を批判するものでもありません。「そんなことでは全ヨーロッパの平和と安全が守れないではないか」との懸念にたいしては、「独立した諸国が、対等な立場で、緩やかに連合する」ほうが、むしろ平和の実現につながるのだと反論しました。こうした理論の背景にあったのが、ドイツ哲学最高の権威カントの思想でした（カント『永遠平和のために』）。

三十年戦争は、ヨーロッパの近代化を目指した側の勝利のうちに終わり、かれらの目標は、この戦争の講和会議（ヴェストファーレン会議）で確定され、その後、長くヨーロッパ国際社会のあり方の基本となりました（ヴェストファーレン体制）。

この理念の危機は、ヨーロッパの外からやってきました。第二次世界大戦後、一方には、アメリカという巨大資本主義国（一国で全ヨーロッパに匹敵するほどの大陸規模の資本主義）の台頭、他方には、ソ連という強敵（資本主義の強敵であるとともに大陸規模の国家）の出現がそれでした。これら二様の脅威の出現にたいして、ヨーロッパは、「独立した諸国が対等な立場で緩やかに連合する」という理念を捨て、ヨーロッパ経済共同体

（EEC）を結成（1957年）、やがて経済を超えたヨーロッパ共同体（EEC）に、さらに強固なヨーロッパ連合（EU）へと結合の度合いを強めてきました。

ところが、その後、冷戦が終結、ソ連は崩壊、アメリカも相対的地位を低下させるということで、外敵は後退、EUを維持する必然性が低下、「EUは無用だ」という意見が飛びだしてきても、それに反論しづらい状況になってきたのでした。ヨーロッパが統合を深める過程で域内・域外からの移民が増大したことなど、EUのもとで発生していた諸問題は、そうした動向に拍車をかけました。ブレグジットをはじめ、各国の反EUの動向は、いわば「ヴェストファーレン体制」への回帰として起こっているのです。

ところで、反EUの動向が、反移民、自国中心主義、ポピュリズム、右傾化、ファシズムへの回帰などと一体となって進行していることには注意を要します。最近の日本では「近代的個人」（自分で考え、自分の意思で行動し、自分で責任をとる人）が十分に成熟しないまま、「みんな同じように考え、同じように行動し、都合の悪いことは他人に責任をなすりつける」という「現代型大衆」が増殖しているかに見えますが、ヨーロッパ

でも、最近「現代型大衆」が増加する傾向にあるようです。現代型大衆は、大量に商品や情報が出まわり、生活様式が画一化された社会のなかで、人々の不安・不満が鬱積すると、確立されていたはずの近代的個人が消滅して出現するものです。こういう傾向は、20世紀前半のファシズム台頭のさいにもあったことでした。今日、ふたたび、しかし今度は、はるかに拡大された規模で、再現されようとしていることには注意を要します。ファシズムは、民主主義の基礎をもっているだけに、暴君の暴走より、はるかに危険だからです。

7. 現下の中国で起っていることの本質は何か？

中国史をつらぬく最大の課題、それは「貧困問題」にどう対応するか？ということでした。貧困問題とは、発展の波に乗れた者と乗りそこねた者との格差・対立の問題です。その意味で、「すべての貧困問題は、相対的貧困の問題として存在する」といってもよいのです。

現代中国の最大の政治課題は、「都市と農村の貧困問題の解決」にあるといえます。その最大の政治課題の具体的・象

徹的発現が「人口問題」です。この問題の解決策として、まず打ちだされたのが「二人っ子」政策でした（1979年）。

しかし、利己的な子が増える、一人っ子を失った親の嘆き、将来の働き手の不足などの問題が表面化、廃棄されることになりました（2015年）。

こうして一人っ子政策の破綻の結果、打ちだされたのが「農村に吸収できなくなった人口3億人を都市へ移動させる」というものでした。しかし、これにも問題があります。強制的・性的に農村人口を都市に移動させることは、かれらを市場経済に組みこむことであり、資本主義経済の渦のなかに放りこむことであり、換言すれば、大量の貧困の発生する経済に投げこむことでもあります。これでは新たな「貧困問題」の発生につながりかねません。

そこで最近とくに重視されているのが「都市に吸収できない人口の国外展開」、具体的には「一带一路」構想です。この構想は、一方で、陸路、ウイグルからカザフスタンを経て、ロシア、さらに東ヨーロッパに向けて鉄道や道路を整備し、中国の企業と人口を展開し、他方では、海路、南シナ海から東南アジアを経由、インド洋に出て、インド、西アジア、さら

にアフリカ諸国に向けて、中国の企業と人口を展開しようというものです。

じつは、このような構想は、過去に、なかでも明の時代にもありました。陸路は、シルクロードをとおして西域諸国との交流を深め、海路は、とくに明の時代、チョン・フー（鄭和）のインド洋への大航海、そしてアフリカ各地との交易がそうでした。これら過去の事例と現在の「一带一路」構想との違いは、単なる交易か、それとも中国の過剰人口、過剰資本の対外排出か、という点にあります。

1世紀前には、西欧列強の過剰資本の対外排出が帝国主義の重大な要因になっていたことを考えると、現在の中国の「一带一路」構想が中国の帝国主義展開の大契機とならないとはいえません。じつさい、中国国内で活路を閉ざされた企業は、政府の後押しもあって、現在、インド洋、西アジア、アフリカ諸国に大々的に進出し、道路・通信などのインフラを整備し、現地生産を展開、現地経済と重大な利害関係を築きあげています。

そればかりでなく、中国は中南米にも急速に進出し、アメリカにたいしては「太平洋分割管理」構想（ハワイ以东をアメリカが、以西を中国が管理するという構想）を提起しています。それは、か

つての西欧列強による「アフリカ分割」を想起させるものです。アフリカ分割は、その過程でファシヨダ事件のような軍事衝突も引き起こしましたが、すでに東シナ海では尖閣問題、南シナ海では九段線問題（フィリピンなど東南アジア諸国との衝突）が起きています。

そのような状況のもとで、シー・チンピン（習近平）は、憲法に個人名が明記され、主席任期は撤廃され、事実上「皇帝」の地位につきました。そのねらいは何か？ 決して単に独裁者になりたかったからではありません。背景に国民（人民）の期待があるのです。

かつて中国歴代の皇帝および皇帝に仕える官僚の最大の仕事は、人民に安定した仕事と生活を保障することでした。具体的には、唐までの時代は「農民に耕作地を保障し、もって生活を保障すること」（その完成形態が「均田制」）、その後は余剰生産物が出まわって商業も盛んになったので、宋以降は「農民と商人（農村の住民と都市の住民）に仕事を保障し、もって生活を保障すること」でした。「それがうまくできなくなると革命がおこって皇帝または権力者はその地位を失う」（易姓革命）とも考えられてきました。

現在の政治指導者たちについていえば、

「これから都市に出る人々が安定した仕事につき、安定した生活ができる」こと、そして「すでに都市に出た人々が安定した仕事につき、安定した生活ができる」ことを保障することが最大の仕事になっています。

中国における社会システムは、何回かのレジームのリセット、すなわち反乱ないし大混乱の発生、そして王朝や権力者の交代を繰り返すことで、社会システムとしては長持ちしてきました。現政権の最大の課題は、現在のレジームの機能を最大限に駆使し、もって中国の社会システムを守りとおすことなのです。その難題は、「西欧型の近代政治（民主政治）」では、とても達成できない」というのが、国家主席から一般人民にいたるまで幅広く受容されている考え方です。それゆえ、レジーム（王朝／政権）は変わっても、中国の社会システムは温存され、結果、たとえば明の時代とあまり大きく変わらない政治と社会が現在もつづいているのです（かつての皇帝と官僚、現在の国家主席と党官僚についても然り、また、かつての「陸」と「海」の「シルクロード」、現在の「陸」と「海」の「一带一路」についても然り、など）。

とはいえ、歴史上の各時代と比して、

現在の中国が大きく異なる点にも注意を払わなければなりません。まずは、現代中国のかかえる「圧倒的に膨大な人口」、そして「圧倒的に拡大した経済規模」です。たとえば、明の時代の中国の人口は5000万人台、清の康熙帝の時代でも、やっと1億人。現在の14億人とは比較になりません。

そんななか、レジームも硬直化してきています。資本主義経済なら普通に起る景気循環（サイクル）が抑えこまれていたため、経済・社会問題、たとえばバブル（不動産投資の制限なき拡大など）が膨張しても、自然に弾けることがないため、政策的対応を待つしかなく、その結果、国内に不満が鬱積してしまいかねません。

これらの事情を考えると、小さな対応（たとえば「中国に加え海外でも」という「チャイナ・プラス・ワン」戦略程度）では対応しきれないのです。そこで、権力の一極集中を押しすすめながら、ますます「一带一路」に懸けるほかなくなっているのです。中国政府としては、「歴史上、例を見ない規模での外延的拡大」および「それにとまなう猛烈な摩擦・紛争・戦争に勝ちぬくこと」、これしかないのです。

8. 新型の破局リセットが視界に入ってきた現在

しからば、国際社会は、そういう中国を許容できるか？ すでに見てきたとおり、昨今の欧米諸国がごとく国内に幾多の問題をかかえ、自国中心主義に傾斜していることを考えると、それはとても不可能だというほかありません。

では中国で急速に膨張すると考えられる国内矛盾は、いつ、どこで、どのような形で噴出しはじめるか？ 考えられることは、中国国内の矛盾が、シー・チンピンのレジームの抑えが効きにくい海外のいずれかの地点（「一带一路」の延長線上）に鬱積したとき、些細なことをきっかけに噴出、ということなのです。急速に海外展開している中国経済の矛盾が中国国内で破裂するなどと思ひ込むことは間違いないのかもしれませんが。

すでに見てきたとおり、資本主義の経済システムは、景気循環（サイクル）をとおした生産と蓄積の成果の定期的リセット、および、生産と蓄積のレジームの更新といういっそう大きなリセット、などのメカニズムを内包しているというものでした。しかし、中国では、これら二様

のリセット（景気循環、そしてシー・チンピンのレジームの打倒）は抑えこまれています。ということは、矛盾は限りなく鬱積しやすく、リセットは一気にシステムのリセット（中国国家の崩壊）に行きつきかねない、という問題を孕んでいます。

現下の世界では、資本主義的循環（サイクル）は、すでに見たように乱れ（2017年には、1987年、1997年、2007年のような周期的経済恐慌が現しなかった——いずれ、まとめていっそう大きな恐慌が襲ってこないとはいえない）、新しい生産と蓄積のレジームが形成される展望は見えておらず、資本主義的社会システムは全体として体力を失ってきているように見えます。

そういう状況のもとでは、小出しの紛争が繰り返し世界各地で展開されつつも、最終的には、中国またはロシアのように急速に成長してきた大国が、在来の大国アメリカと戦う地点に行きつくこと（＝究極の戦争の勃発）は、論理的次元では、十分に考えられることです。

もしそれが現実となったら、それは、1970年代の石油危機や1987年のブラック・マンデー事件はもとより、1929年の世界大恐慌を凌ぐばかりでな

く、第一次世界大戦、第二次世界大戦とも次元を異にする新型の破局、すなわち、人類史上、未曾有のリセット、に至る危険性が否定できません。現在は、そのような巨大なリセット（私はそれを「メガリセット」と呼びたい）の場面が視界に入ってきた、といえないでしょうか？人口についても、経済規模についても、急激かつ圧倒的な膨張を招来させた資本主義的社会システムは、そのメガリセットをとおして終了するのかもしれませんが。（2018年5月10日・公開フォーラム）

〈参考文献〉

カント『永遠平和のために』
マルクス『資本論』、および『マルクス・エンゲルス全集』

レーニン『帝国主義論』、および『レーニン全集』
ウォーラス・ステイン『史的システムとしての資本主義』、川北稔訳、岩波書店、1985年

エドワード・グリーンバーク『資本主義とアメリカの政治理念——5つのレジームの変遷と現在』、瀬戸岡紘訳、青木書店、1994年

ロバート・パクストン『ファシズムの解剖学』、瀬戸岡紘訳、桜井書店、2009年

有井行夫『マルクスの社会システム理論』、有斐閣、1987年

江口朴郎『精解 世界史』、法文社、1959年

山田鋭夫『レギュラシオン理論——経済学の再生』、講談社現代新書、1993年

南克己『アメリカ資本主義の歴史的段階』、『土地制度史学』第47号、1970年

瀬戸岡紘『アメリカ——理念と現実』、新潮社、2006年

瀬戸岡紘『戦後世界資本蓄積過程のひとつの総括としての現下の世界経済恐慌』、駒澤大学『経済学論集』第41巻第1・2号、2009年

瀬戸岡紘『すべての戦争は国内矛盾の対外転嫁として勃発する』、駒澤大学『経済学論集』第47巻第2号、2016年

その他、関連する多数の文献、および最近の新聞・雑誌・ラジオ・テレビ等のニュース

筆者略歴（せとおか ひろし）

1945年 東京生まれ。

1968年 早稲田大学商学部卒業。

1975年 同大学院商学研究科経済学専修博士課程単位取得退学。

1977年—88年、97年 コロラド大学客員研究員。

1977年—88年、97年 コロラド大学客員研究員。

公開講演会記録

激変する北東アジアと中国

——金正恩は「170度の転換」をした

東洋学園大学教授 朱 建榮



今、アジアは第二次大戦以降、続いてきた冷戦構造が音を立てて崩れ始めている。6月12日の米朝首脳会談をたんに核の問題としてだけでなく、地域内の諸国の関係、冷戦構造そのものに投げかける影響という面から考えていきたい。

まず今年の初めから北朝鮮の姿勢が変わり始めたその背景、そして接近した米朝両国のそれぞれの思惑、さらに金正恩委員長の突然の訪中はなにを物語っているのか、米朝の動きに中国がどうかかわっているのか、といった点を順次検討していきたい。

北朝鮮の外交——隙間の利用と時間稼ぎ

まず今年の一連の動きは北朝鮮から仕掛けたものと言っている。2月に韓国で開かれたピョンチャン冬のオリンピックに北朝鮮は代表団を派遣したのが始まりで、それが韓国特使の招き入れ、その特使がワシントンで米朝の仲介を果たして、3月9日、トランプ大統領が「（金正恩委員長と）会談してもいいよ」と言うところから見てみる。

中国国内には北朝鮮との向き合い方に大きく分けて3つのグループがある。

1つは朝鮮戦争と一緒に戦った人たちにつながるグループ。この人たちは北朝鮮との友情を大事にして、かりに悪いところがあっても北朝鮮の体制は守らなければいけないと考えている。中国共産党

内の長老、あるいは保守派が中心だ。このグループは毎年、北朝鮮に代表団を派遣しているのだが、今年の早春、その旅行団が北朝鮮の国内で交通事故に遭って、数十人が死傷した。この時は金正恩委員長が自ら病院を見舞ってニュースになった。

第2のグループは党・政府機関。共産党の中央連絡部という部署と政府の外交部の人たちで、この両部門では若干ニュアンスは違うが、いずれも現実主義で北朝鮮と付き合っている。イデオロギー的、心情的ではなく、隣国としての付き合いを進めている。

3番目としては文化大革命を経て、外国に留学したり、これまで明らかにされなかった資料を見たりして、中朝関係を

客観的にとらえ、北朝鮮は実は中国にとつて「お荷物」ではないかと考える人たちがいる。さらにはたんに「お荷物」ではなく、中国の国益をことごとく妨害してきた、あるいは中国はうまく利用されてきた、そういう相手ではないか、という不信任を持つ人たちも、今、学者の中には相当いる。

代表的な人物としては、私が一昨年『最後の「天朝」』という著書の翻訳を岩波書店から出した華東師範大学の沈志華氏、それから北京大学国際関係学院院長の賈慶国氏、そして最近の北朝鮮について「170度の転換をした」という名言を吐いた共産党中央党校教授の張璉槐氏といった人々がいる。張教授は昨年まで、北朝鮮と米国の武力衝突はありうる。中国もそれに備えなければならぬと主張していた。その人が、今年2月からの北朝鮮の方針転換を重視しなければならず、180度とは言えないが、「170度の転換」だと言った。その意味は後で説明する。

ではその変化の背景はなにか。まずはやはり国際社会の包囲網が効いてきた、これは事実だ。今、紹介した沈志華氏は「北朝鮮は弱い、小さい。にもかかわらず、数十年間、体制を維持しただけでな

く、かなり遅しく、賢く生き抜いてきた」と言っている。それはなぜ可能だったのか。理由は2つあった。

第1の理由は大国の間の隙間、対立をうまく利用したこと。例を挙げれば、朝鮮戦争の発動について、当時の毛沢東は賛成しなかった。金日成はまず当時のソ連のスターリンの承諾を取り付けて、1950年の5月13日、つまり開戦した6月25日の一か月前に北京に行き、「これから祖国統一戦争を始める」と毛沢東に言った。それを聞いて、毛沢東は怒った、「ちょっと待て、なんでだ」と。すると金日成は「私はスターリンと相談してきた」と言う。毛沢東「では、私はスターリンに確認する」。それで毛沢東はモスクワに電報を打って、金日成の言葉を確かめた。

スターリンの答えは微妙なものだった。「確かに彼から再三、そのことを持ち掛けられ、結局、私は同意した。しかし、毛沢東同志と相談しなさい。彼が反対したらすべて白紙に戻す、と言った」というのが答えだった。

つまり、スターリンはボールを毛沢東に投げたのだ。そこで毛沢東は金日成に言った。「われわれは本当は台湾解放を優先したい。しかし、スターリンとあな

たが相談して決めた以上、朝鮮の統一戦争に反対しない」と回答した。

このように、金日成は中ソの間をうまく立ち回って、戦争を始めたのだが、開戦直前にも毛沢東に連絡がなかった。開戦後、8月末まではソ連軍の顧問の指導のもとに戦いが行われたのだが、中国にはなにも情報は提供されなかった。

初めのうち戦況は北朝鮮に有利に進んだが、9月に米軍が仁川に上陸してから、形勢逆転、北朝鮮軍は北へ逃げかえることになった。そうなる、中ソにとっても米軍が鴨緑江にまで押し寄せてくるのは困るから、北朝鮮を助けざるをえなくなる。中国は義勇軍を朝鮮に派遣した。こうして金日成は生き延びた。そして戦後は、始まった中ソの対立を利用して両国に自国への援助を競わせた。

第2の理由、これは北朝鮮の得意技だが、時間稼ぎをすることだ。1956年の8月から9月にかけて世界の共産党の歴史上で極めて異例なことが起こった。北朝鮮労働党が2度、中央委員会総会を開き、後の会議が前の会議をすべて否定したのだ。まず8月の総会で金日成は中国から帰国した「延安派」と言われる幹部たちを反党分子として粛清した。そこで反党分子とされた人たちは必死に中国

に逃げた。彼らの話を聞いた毛沢東は激怒した。その時、ちょうどソ連からミコヤン副首相が北京に来ていたので、彼とも相談して、金日成同志の過ちをたださなければならぬということになった。

そして8月末、ミコヤンと中国からは朝鮮戦争で中国軍の司令官を務めた彭徳懐国防相の2人がピョニャンに出向いて、金日成に「延安派」を反党分子とした決定はおかしいと申し入れた。金日成はそれを受け入れて、9月に総会を開きなおして、一か月前の決定を取り消す決議を中ソ両国代表の立会いの下で採択した。そこで2人はそれぞれ帰国したのだが、そのような大騒ぎがあったにもかかわらず、金日成は約束した中央委総会の決議を一向に公表しなかった。

9月中旬になって、しびれを切らしたピョニャン駐在の中国大使が「約束を守らないなら、中国はきびしい対応をせざるを得ない」と申し入れ、金日成はついに会議の決議を翌日の「労働新聞」の1面の下の方に「何人かの同志に対する反党分子という処分は取り消された」という小さな記事を載せて報じた。それだけだった。

中ソとも不満だったが、引き延ばしの戦術にはまった。そして翌10月に東欧で

ポーランド、ハンガリーの動乱が起こった。ソ連はその首謀者とされた人々たちを反党分子として処分した。金日成はそれに乗じて、「我々も党内の反党分子を処分してどこが悪いか」と巻き返す理由を得た。その結果、いつの間にか9月の決定は取り消されて、その後の歴史では8月の決定だけが残されている。金日成の時間稼ぎ戦術が見事に成功した例だった。

「170度の転換」とは

このように北朝鮮は小国として、大国を利用し、競わせる一方で、大国の足並が長期間そろっていないのを見越して、相手側のスキを待つという戦術で、これまでやってきた。

しかし、そうしたやり方が昨年来の相次ぐ制裁では通用しなかった。特に昨年12月の国連決議では北朝鮮への石油の供給を9割減らすことになった。その上、さらに核実験を行えばもっときびしい措置を取るとされた。

つまり今回は大同土の間に付け入る隙間がなかったし、得意の時間稼ぎも自分にとってなにもプラスにならない。軍事面はどうか。米国の軍事力は確かに怖

いが、これまで北朝鮮は韓国との最前線に千門とも二千門ともいわれる大砲を並べて、ソウルを人質にする戦術を取ってきた。ソウルに大きな人的被害が出るとなれば、米も簡単には武力は使えないという判断だった。ところがトランプ大統領は本当に武力を使うかもしれない。さらに北朝鮮から見ると、どうも中国の動きがあまりいい。裏で米と手を組んでいないか、ということが重なって北朝鮮は危機感を高めただろう。

金正恩にすれば、かねて祖父や父親をしのぐことをなしたとげたいという気持ちを持ってやってきた。それが彼を核爆弾や長距離ミサイルの実験、開発に駆り立て、ともかく核兵器なるものを手にするにいたった。現在、10個以上の核弾頭をもっているのではないかと見られている。ミサイルもどうやら米本土に届くところには来てはいる。

国際社会の圧力を押し切ってここまでやってきた。しかし、ここからさらに進むことはそれだけ危険が増す。それに核開発も経済発展もという「並進路線」をこれ以上続けることは無理だ、ということで、彼は大きな決断をしたのではないだろうか。

このまま「並進路線」でいけるか、あ

るいは核兵器を完全に使えるところまで開発を進めるか。それともこのあたりで交渉に切り替えるか。この点での判断が行われたのではないか。

核を米国に正確に落とせるか、というと、現状で北朝鮮は、すくなくとも2つの点が未完成だとされている。1つは核弾頭の小型化、1つは大気圏外から大気圏内に再突入する際の技術だ。これらができるまで突っ張るか。すでに核は持ったということで交渉に入るか、この選択で、金正恩はすでにわれわれは8割程度だが、核兵器を持った、ということ、次の段階に進もうと決めたのではないか。

そこで「170度の転換」の意味だ。路線転換はやむを得ないが、今後あるいは大同土の争いが起きたりして、また付け入るスキができれば、場合によっては、元の路線に戻る余地をわずかでも残しつつ、つまり「10度」の余地を残しつつ、対話の道に入ったということだ。

その結果、意外に早くトランプとの直接会談が設定されるところまで事態は進んだが、途中で1度、話が壊れそうになった。5月24日にトランプは「会談は中止だ」と言った。あれは双方の内部事情、北朝鮮側では会談路線への切り替えに既得権益層から異論が出た、また米国内で

も北朝鮮の「核放棄」に疑念が生じ、強硬派からかつてのリビア方式といった言葉まで使って、完全な核放棄が先だという議論が出たことが原因と思われる。

日本や韓国なら、北朝鮮との交渉が一筋縄ではいかないことは常識だが、トランプは慣れていないから、そんなに面倒ならやめようと言いつつ出した。ここで興味深いのは、北朝鮮の金桂寛（キム・ゲガン）第一外務次官の発言で、「リビア方式は困るが、会談中止という決定の再考を求める。われわれはいかなる方法でも対話の用意がある」と、大慌てで会談の実現を求めた。これまでのやせ我慢をしても弱みは見せまいとしてきた態度とは大きな違いだった。それだけ追い込まれていたということだろう。

そして数日後に元に戻って予定通りにシンガポール会談は行われることになった。異例の展開だった。その結果、4項目の合意が発表された。しかし、この合意だけを見る限り、たいした合意ではない。非核化のタイムリミットが示されるのではないかとという期待も裏切られた。せいぜいが玉虫色というところだった。

同時にこの合意の裏側では、双方が譲れない線を確認しあった覚書が交わされたという報道もある。まあこれから先の

ことは、この後、行われる交渉で決められていくと思われる。それを見なければ何とも言えない。

1つはつきりしたのは米国内でも、トランプが承諾したのなら、ということで、「非核化は段階的に進める」という北朝鮮の望むアプローチを受け入れるムードになってきたことだ。北朝鮮は初めからそう主張していたし、それを中国もロシアも支持していた。結局、「まず非核化」という強硬路線には日本の安倍首相1人が残ることになった。

それにしても北朝鮮が本当に対話路線に転向したのか、あるいは「最後の10度」に立ち戻って、これまでのように結局は時間稼ぎの戦術で元の本阿弥になるのか、つまり金正恩は核を持ったまま現在の苦境から抜け出せるような情勢の変化を待つつもりではないのか、そこはまだ分からないというのが本当のところだろう。

「習・金」新時代の大陸と半島

次に中国との関わりに話を移したい。ご存知のように昨年の中朝関係はどんな底状態だった。中国にとって北朝鮮の存在というのは、冷戦後でも胡錦濤時代、つまり2010年代の初めまで、米国と

いう強大な軍事力との緩衝地帯というのが第1の位置づけだった。

第2に、もし北朝鮮で戦乱が起きると大量の難民が生まれて中国の東北部におしよせるだろう。そうになると、中国も大変な影響を受けるということで、「安定優先」が中国の北朝鮮外交の二番目に重視された目標だった。21世紀に入って、中国外交部などは「北朝鮮の核開発もいよいよ放っておくわけにはいかない」との危機感が出て、2003年からの6か国協議の開催に中国はイニシアティブをとった。しかし、外交の優先順位でいえば、三番目のものだったと言わざるを得ない。

その結果として、それ以降は中国にとっても北朝鮮の核開発は見えて見ぬふりをしているわけにはいかない問題となったが、真剣さを欠いていたと言われても仕方なかった。

その位置づけが習近平時代になって変わった。習近平はより広い視野で外交を展開しようとしている。朝鮮半島にしてもただ北朝鮮だけを見るのではなく、半島全体を視野に入れて考えるようになった。そして昨年は、北朝鮮の核を第1の課題として取り組むようになった。

なぜなら北朝鮮の核開発がこれ以上進

んで、米朝が軍事衝突するといった事態を中国は見たくない。しかし、北朝鮮はそれについての中国の言うことに耳を傾けようとしめない。ならばもうすこしきびしく接しなければならぬ、となる。さらに北朝鮮の核実験は中国国境から80キロないし100キロ程度のところで行われるから、去年の核実験で延辺自治区では大きな地震があった。放射能汚染も心配である。

すこし横道にそれるが、今、中国では東北3省（遼寧、吉林、黒竜江）を除いて、食糧を自給自足以上に生産しているところはない。米どころは南部にたくさんあるし、北は麦作地帯だ。しかし、経済の発展で耕作面積が減る一方で需要は増えるから、どの省も自給以上に余力はない。東北3省は大都市にとって大事な食糧の供給地だ。とくに黒竜江省は食糧の戦略備蓄の基地で倉庫がたくさん作られている。

したがって、もし北朝鮮の核実験で放射能被害が広がったりすれば、東北地方だけでなく、中国全体の食糧供給に影響する。その危機意識が去年、大きく高まったのは事実だ。

しかし、政策の転換には理屈づけが必要になる。そこで去年4月5日、習近平・

トランプ会談が米のフロリダで行われた翌日の6日、『環球時報』という新聞が「北朝鮮とは長い友好関係があるが、中国自身の安全と安定が最優先だ」という立場を打ち出した。つまり、米との緩衝地帯という役割より、北朝鮮の核実験そのものが中国の脅威になった、ということだ。これが中国の路線転換に対する自らの理論づけだった。

それ以降、北朝鮮が中国を名指しで非難すれば、一方では中米が足並みをそろえて北朝鮮に制裁を課すという事態になった。これは米中がさしでどこまでやるかを相談した結果のはずだ。中国は北朝鮮の貿易額の90%を占める相手国だから、中国が協力しなければ、制裁は効力を持たない。

北朝鮮にすれば、中国がわれわれを裏切ったということになるから、去年の11月以降、北朝鮮では国連による制裁と言わずに「中国による制裁」という言葉を使っているという韓国の報道さえあった。

昨年はそこまで中朝関係が悪化したことを考えれば、最近の北朝鮮は君子豹変も甚だしい。北朝鮮によれば3月9日にトランプが米朝会談に応じると言った後に、自分の方から中国に金正恩訪中を申し入れたということだ。折から中国は全

人代の開会中だったが、24、25、26日の訪中日程を受け入れた。この間、北朝鮮が訪中の理由としてあげたのは「われわれは非核化の方針を決定したので、それについて中国の同志と協議したい」ということだった。中国もそれなら応じようということになったようだ。

金正恩はまだ35歳だが、たいしたものだ。去年まであれば仲が悪かったのに、何事もなかったように北京行って、習近平に会った時にはその話を自分でメモするなど、貴方が指導者だという態度をとった。習近平も自尊心をくすぐられたに違いない。この会談の合意文書には今後、「両国の指導者は戦略的な問題について協議する」とある。これが2回目、3回目の会談につながったのだろう。

中国側にしても、金正恩を北京で2つの場所に案内したことに重要なメッセージをこめた。1つは「天壇」、ここは天命を受けた皇帝が祭祀を行う場所だ。つまり金正恩を北朝鮮のトップであることを中国は認めるというメッセージだ。クアランプールの空港で殺された金正恩の義兄、金正男には前妻と後妻に1人ずつ息子がいて、1人は米にいるようだが、もう1人は北京にいると言われている。それが金正恩にとっては気がかりなはず

なのだが、それをこの天壇行きで、金正恩を「皇帝」と認めたと見られるのだ。

もう1か所は中関村。ここはITをはじめとする先端科学のベンチャー企業が集まっているところだ。ここを見せた意味は、北朝鮮は金日成総合大学で大勢の先端科学を学ぶ学生を育てているのだから、本格的に経済発展に集中すれば、中国よりも早く発展することができるはず、というメッセージだ。

そしてこの金正恩訪中の直後に今度は朝鮮労働党の副委員長を団長に各地方のトップを網羅した代表団が北京、上海などを訪問した。要するに金正恩の第1回訪中は昨年までの中朝関係を清算して、前向きに進む土台を作ったと言える。

2回目の大連行きは1回目の成功を踏まえ、米朝会談の具体的な戦術について中国の考えを聞くとともに、かつて北朝鮮のトップは飛行機で外国に行くことはなかったから、金正恩はテスト飛行をかねて、大連まで飛んだのだろう。

そして米朝会談後の3回目の訪中は、昔の社会主義兄弟国としての関係の復活ではなく、これから米朝会談を進めてゆく道のりの中で、中国に後ろ盾の役割を果たしてもらおう約束を取り付けるのが目的であったのではないか、と考えている。

一方、中国はどうか。習近平は1回目、

2回目の会談を通じて、どうやら金正恩を高く評価した。北朝鮮はトップダウンの国だが、今度の米国への接近では内部に強硬派の反対論もあったと思う。それを今後も金正恩は押さえつけていけるかどうか、習近平は3回の会談を通じてなんとかいけると判断したのではないか。もっともだからと言って、これからの非核化の道で中国は常に北朝鮮を擁護するとか、すぐに制裁解除に踏み出すとかの約束を与えたとは思えないが、とにかく非核化の道から外れない限り、米朝交渉の過程では中国は北朝鮮の後ろ盾の役割を果たすことになるだろう。

そこで私の考えだが、やはり北朝鮮は60年も70年も続けてきた戦略方針をここですべて放棄したとは思えない。

米中対立と朝鮮半島の新たな役割

今、米は中国に貿易戦争を仕掛けている。これがどこまで広がるかは不明だが、すでに台湾問題にまで波及しつつある。米議会ではすでに台湾と共同軍事演習をやってもいいという決議まで採択した。中国にとって台湾問題は絶対に譲れない。この対立がエスカレートすれば、北朝鮮

問題が犠牲になる可能性がないと保証することはできない。

次に習近平の朝鮮半島認識について考えたい。習近平は内政でも外交でも今までの延長ではいきたくないと思っっているようだ。

建国以来の30年は毛沢東時代。安全保障優先の政治の時代だったが、文化大革命の失敗でこのままでは駄目だということになり、鄧小平時代の30年が始まった。この時期は西側の市場経済を利用して経済を発展させた。しかし、一方では不正や汚職がはびこった。

そこで習近平のいわゆる「新時代」が始まったわけだが、習近平流のきびしい世論統制を含めて政治統制一本やりでうまくいくかどうかはまだ分からない。ただ内政も経済も社会も今までの対応では新しい方向が切り開けないことは、皆、分かっている。

西側のやり方をそのまま持つてくるか、胡錦濤、温家宝の時代はそれでやろうとして、あまり成功しなかった。習近平は逆の方向で試している。それも成功するかどうかはこれからにかかっている。いずれにしても内政は変わり始めた。

外政はどうか。どこの国もある程度、国内経済が発展すると対外進出に目を向

ける。日本も1960年代にGDP世界第2位になってから、東南アジアを皮切りに世界に進出し始めた。中国も「一路」に象徴されるように対外進出の時代に入った。

冷戦はとうに終わり、中国のGDPは昨年、米の67%にまで迫った。そこで米が慌てだしたのが最近の米中の緊張の原因だろう。これから中国外交はそう簡単ではあるまい。その中で習近平の外交における朝鮮半島への見方も変化が生じていると思う。

私には表面に現れる現象しか見えないけれど、いくつかヒントがある。3年前の2015年9月3日、第二次大戦勝利70周年の記念式典に韓国の朴槿恵大統領が北京へ行った。習近平は右手にロシアのプーチン、左手に朴槿恵を重要な客人として迎えた。

朴大統領が北京に行ったのには1つの目的があった。それは習近平が朝鮮半島の統一の問題をどう考えているかを問いただすことだった、と聞いている。それに対して習近平は通訳だけを交えた2人だけの席で「われわれは統一に反対しない。平和的統一であり、朝鮮民族の利益になるなら、われわれは支持する」と初めて表明した。

これはいわゆる「小道消息」(町の噂)ではない。これを聞いた朴大統領は興奮のあまり、帰国の特別機の出発が迫っている中で、わざわざ機内に記者たちを招き入れて、習近平の言葉を伝えた。記者たちはそれを報道したが、同時に、本当かな?というところで、習近平の「耳打ち外交」という言葉も当時使われた。

中国はこのあたりから、北朝鮮を緩衝地帯と見るという段階から進んで、朝鮮半島全体のことを考え始めると言えるだろう。去年の後半、中国のある大学で、周辺諸国が朝鮮半島全体をどう見てきたのか、今後、統一を含めてどのような対応がありうるのか、それをめぐるシンポジウムが開かれた。

私も「日本から見た朝鮮半島」という論文を書いた。日本の学者の見方を整理したものだが、私が見たところでは、習近平外交はより広い視野を持っているように感じられる。

米朝首脳会談が行われ、米韓合同演習中止の話が出て、さらに在韓米軍の撤退にまで話は及んでいる。そこから中国は北朝鮮をそのかして、在韓米軍の撤退を要求させるだろうという観測が出ている。

しかし、私の見るところ中国の朝鮮半

島についての関心は、今のところ非核化の1点に絞られている。余計な要求は出さないほうがいい、ということだ。非核化を本当に実現すれば、言わなくともほかにいろいろな可能性が出てくる。今の段階で米軍をどうとかいう必要はない。休戦協定が平和協定になれば、朝鮮戦争以来の冷戦構造は崩れる。そうなれば、中国が言わなくても韓国でもなぜ米軍がいなければならぬのか、という声が自然に出てくる。すでに文在寅大統領の補佐官がそういうことを言っている。今後、それはますます広がるだろう。中国がそれを言う必要はない。

昨日も中国の外交官とのオフレコ懇談会に参加したのだが、中国は米軍の撤退を要求するののかという質問に、彼は「中国は小細工をする必要はない。自然の成り行きに任せる」と答えた。つまり「非核化すればそういう成り行きになる」ということだと、私は受け取った。

しかし、それは簡単なことではない。トランプがいったんシンガポール会談を中止すると言った時に、その理由として「金正恩が2回目に中国に行った後で、態度が変わった」ことを挙げた。これからも北朝鮮がなにか要求すると、中国がそそのかしているのではないか、という

話がきつと出てくる。そういう時に事態をしっかり読み取っていかなければならぬ。

中国と米との摩擦にしても、GDPはかりに10年で追いつくとしても、軍事力では30年経っても中国は米に追いつかない。去年秋の第19回共産党大会で明らかにされた中国軍の発展戦略では、「2050年には中国軍を世界一流の軍隊にしたい」と言っている。「一流」は複数形だ。米を追い抜くことは不可能という意味だ。中国は米と対等の地位は持ちたいが、軍事的な対抗は避けたいのだ。

一方の米にしても、トランプと政府のエスタブリッシュメント層を分けて考えれば理解しやすい。後者の多くは中国を脅威と考え、経済、技術、台湾、南シナ海などで中国に揺さぶり、圧力をかけている。中国の複数の学者が言っているのだが、米はほかの国に並ばれるのをいやがる、これまで百年間で3回、3つの国が国力で米の3分の2まで来て、けり落された。ドイツ、旧ソ連と日本がその3国だ。今の中国はさっき言ったようにGDPが米の67%、これからの中国はきびしい。

しかし、トランプはエスタブリッシュメント層とちがって、「アメリカ・ファ

スト」で国内の利益重視と目の前の選挙重視だから、習近平は米とは貿易黒字の解消などではトランプになるべく譲歩し、中国の長期発展の環境を守ろうとしている。そういう意味でトランプとの間の数少ない協力点が北朝鮮問題だ。したがって、非核化を大事にしながら、次の段階の構造変化を展望しているというのが、今の中国の戦略であろう、と見ている。(2018年6月21日・公開アジア研究懇話会)

講師略歴(しゅ けんえい)

- 1967年 上海生まれ。
- 1981年 華東師範大学外国語学部卒業。
- 1984年 上海国際問題研究所付属大学院修士課程修了。
- 1986年 来日。
- 1992年 学習院大学で博士号(政治学)取得。
- 現在 東洋学園大学教授。
- 著書 『毛沢東の朝鮮戦争』(岩波書店)、『毛沢東のベトナム戦争』(東京大学出版会) など。

東京幻視芸能考

記録作家 石飛 仁（会員）

はじめに

昨年来、私は近世と現代の二つの歴史テーマに向き合う必要がでてきて都内を歩き回りました。日常見慣れていた東京ですが、歴史の重みを秘め、急速に変容する姿は不気味でさえありました。人の流れを吸い込んで吐き出す日本の心臓部大東京を、覗いたついでに、何度も廃墟を体験してゼロから再興したこの不思議な大都市の魅力を、文化芸能を切り口にして、解いてみたいと思います。この国際善隣協会の機関誌としては、少々毛色の変った「都市風景抄」とでもいう駄文、二回になりますが、会員暦十数年になる私が、記録作家系演劇人という宿娼を身に着けた異端であることから、目

くじら立てずに少々お付き合ひ願っておきたいと思います。

私が、東京を歩き回り埋もれた歴史の幻影を掘ることになった二つの歴史テーマというのは、江戸城を造った太田道灌につながる三田樹木谷（港区）にあった「松久寺」（慶長十年一六〇五年に麹町に誕生し、明暦三年一六五七年の江戸大火の後に、三田樹木谷に移転し、昭和四十二年一九六七年に鎌倉浄明寺町にさらに移転し廃寺直前のところを四十四世市川智彬住職が再興した曹洞宗の寺）のルーツ調べであり、もう一つが、先の大戦で、東京大空爆（昭和二十年一九四五年三月十日）によって廃墟となった東京浅草で、生きたためのバタヤ共同体「蟻の街」（隅田公園内）を造り、そこで奇跡的な十年を貫徹した人々を詳しく調べるとい

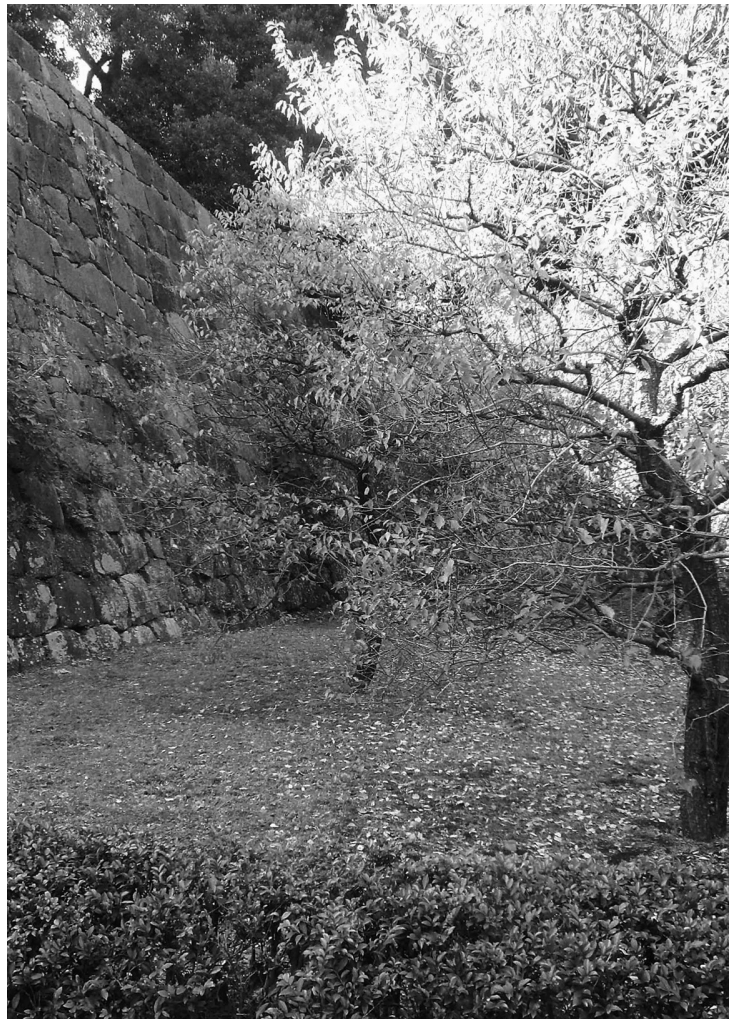
うものです。

其の一

一、文武両道の太田道灌が築いた江戸城の梅林

今年の「善隣」五月号表紙を飾ったのが、江戸城天守閣跡の石垣でした。広大な江戸城内の本丸御殿や大奥の前に聳えていた天守閣は、明暦三年（一六五七年）江戸大火（別名振袖火事。後述）の延焼によって炎上して以来、再建されることなく、石垣だけの江戸城天守閣として、三百六十一年後の今日に至っているものです。私が、今上天皇になってから北の丸公園として一般公開されるようになって

たこの本丸御殿・大奥の跡地に駆けつけたのは、太田道灌（一四三二—一四八六）による築城（長禄一年一四八六年）以来、今日まで絶えることなく城内の一角に植え継がれていた梅林の存在をこの目で確認するためでした。江戸城天守閣跡に登ってから東方に向かって急勾配の坂を降りていくと、その両側の一角に梅ノ木が林立していました。〔写真①〕



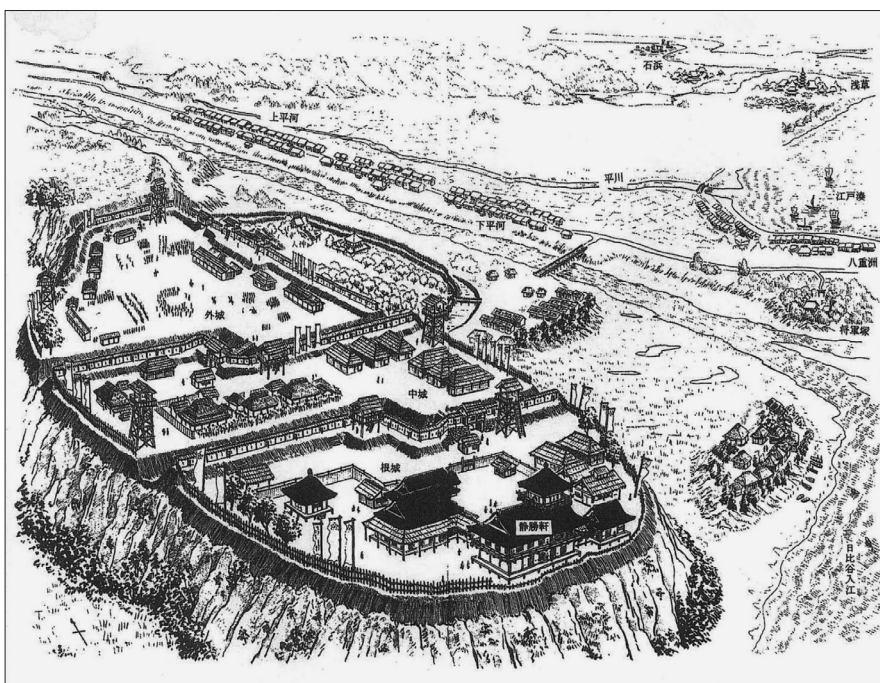
①太田道灌が植えた数百本の梅ノ木は、急坂に面して、今もおなじ場所にあった。

この梅林の解釈は、城の中で実のなる木として戦国武将には大変重宝がられていただけのことではなく、太田道灌は、学問の神様右大臣・菅原道真（八四五—九〇三）に深く傾倒していたことから、梅の花を愛した詩の大家にあやかって、城内に梅ノ木を大切に育てていたなごりです。そしてその梅林の隣に崇敬する菅原道真を祭る天神社も文明十年一四七八

年六月に建立していたのです。

戦国期（鎌倉末期から室町にかけて）の武蔵野国支配の中核地は、江戸湾から平川を上って物資を運んでいた川越（埼玉県）でした。この地は後の江戸幕府を支えていた重要な地域で、背後には秩父山地を控えた地勢にあり、水の供給源となる武蔵野台地（谷地に湧き水あり）だったのです。太田道灌と父の太田資清（岩槻城主）は、川越の近くの越生を本拠としていた時代がありました。彼ら親子は、その地の名刹「龍穩寺」曹洞禅（兵火で消失）を、鎌倉から続く禅僧の指導を受けて帰依していた縁で、この寺を再興しています。そのときの「龍穩寺」五世住職が、関東数奇文化（鎌倉発栄西の茶道と風流の粋の文化）を身につけた曹洞禅の僧・雲岡舜徳でした。

太田道灌は、若くして江戸城を建設して城主（長禄一年一四五七年・二十五歳）となったのですが、その折に、江戸城内に、詩を学ぶ学習館「静勝軒」（住居も兼ねる）を建てています。太田道灌は、戦術戦略に長けた連勝の戦国武将として名高いだけではなく、鎌倉五山や京都五山から高名な詩僧（万里集九等）を招き、その指導を受けた文武両道の人だったのです。一説では太田道灌自身の作詞では



②太田道灌が築いた江戸城（復元想定図）

江戸時代の本丸大地上に三つの曲輪を連郭状に掘り切りにして区切って、根白の先端に「静勝軒」（居間）を建てていた。（西ヶ谷恭弘復元・香川元太郎イラスト）

ないかとまで言われて残っているのが、有名な「七重八重花は咲けども山吹の実の一つだに無きぞかなしき」ですが、出陣するときには必ず同僚武士たちと鎧の姿で歌会をやっていたという、文芸にも

誉れ高い武将だったのです。

太田道灌が造った江戸城（この時、室町幕府の將軍は義政）を、現代に復元した想定図（西ヶ谷恭弘復元・香川元太郎イラスト）があります。〔図②〕

これを見ていただ

きたいと思います。

道灌が造った時代の江戸城は、まだ石垣は積み上げられておらず土塁城ですが、軍団の訓練場宿舎とともに、天神社や梅林がちゃんと描かれていますし、江戸湾から富士山や筑波山に江戸湾の三方を遠望できる詩想を練る館「静勝軒」もしっかり描かれています。陣の中心を「静勝軒」と名づけたのは、太田道灌にとっての戦陣の哲学が、静かに攻めて静かに勝利するということだったことからつけた戦略上の含意があるネー

ミングです。殺戮に明け暮れる、武将の生死観が「能」の幽玄に込められていたように、太田道灌の心のうちには激しい戦闘に臨む虚無が身体にしみついて、その世界観が思念に込められていたと思います。

二、太田道灌の菅原天神崇敬を伝え た「松久寺」のルーツ

さて、どうしてそのことが、わが「松久寺」（鎌倉に現存する曹洞宗四十四世の社寺）のルーツ調べとつながるのかということについて触れておきます。「松久寺」の親寺は、現在も港区芝愛宕山に存在する曹洞宗江戸三大寺の一つ「青松寺」（宗門の学窓）です。実は文明八年一四七六年に、この「青松寺」を麹町貝塚に創建したのは、太田道灌です。彼の意図と構想を考えておくには極めて重要な創建だったことが窺えるのです。この「青松寺」の初代住職になった人こそ太田道灌の人生の師である、「天龍寺」再興時の住職雲岡舜徳その人でした。越生時代からの師弟間の強い絆がこの「青松寺」を創建させていたのです。江戸城内の詩の学習所でもあった「静勝軒」での、文人受け入れだけでは、間にあわない間

題が築城後に起きていたのです。太田道灌が江戸城を築いた十年後の応仁一年一四六七年、京都で「応仁の乱」が勃発しているのです。京都五山の東山文化がいよいよ花開かんとするとき京市街を舞台に、東西に軍が分かれての戦乱が起き、戦場となった京都は衰退する一方になったのです。文芸を磨き禅を極めようとする京の文人たちは、戦場の京を離れるしかなかったのです。彼らは、関東に逃げて保護者を求めるようになったのです。その受け皿の一つが、教育機関としての「青松寺」であり、その周辺に末寺の創建が相次ぐことにつながるのです。太田道灌には、上杉一門の発展を頭に描いていた軍事戦略構想があり、文人の保護を生かして国の基礎教養を拡張しようという腹がありました。そこで、尊敬する雲崗舜徳を初代住職にして「青松寺」を創建しその受け入れ先としていたのです。ところが、連戦連勝の途上にありながら想定外にも、主君の上杉定正に呼び出されて上邸するや、くつろげと言われて、風呂を浴びた上がり場で、槍で刺されて絶命するのです。

彼は叫びます「一門の最後なり」と、浅ましい猜疑な嫉妬が、一門の将来を潰したという無念の叫びでした。文明八年

一四八六年五十五歳の死です。このとき、京都五山から太田道灌が賓客として江戸城に迎えていた詩僧がいました。

『梅花無尽蔵』の作者で知られる万里集九でした。彼は道灌の無念の死をモロに受け止めています。知の英雄太田道灌を敬愛したこの万里と禅一門の「青松寺」僧徒は、引退し越生に居た父の太田資清とともに、太田道灌の回向を唱え続けました。平安時代深く日本文芸を興した悲劇の右大臣菅原道真を崇敬して祭ってきた太田道灌の悲劇が、重なりあって靈魂よ靖かれと禅僧の読経が続くのです。

この太田道灌創建の「青松寺」の末寺である「松久寺」（一六〇五年に青松寺十世住職道牛によって創建）こそが、その無念を継承自覚した末寺として成立していた、というのが私のルーツ追跡調査の目的だったのです。

江戸城の半蔵門口の近く、麴町六番町に建立された「青松寺」の末寺「松久寺」は、通常の寺と違って、阿弥陀仏を祭る本堂と並立させて境内に「花城天満宮」を建て、菅原道真を大きく祭った特異な寺だったのです。麴町六番町にあった

「松久寺」は、後、明暦三年の江戸大火から十一年目の寛文八年一六六八年に、麴町六番地から三田樹木谷に移転してい

ます。そこでの話になりますが、その話というのは次のようなことです。菅原道真が四十二歳のときに自作した「菅公坐像（三寸八分）」がありました。五十七歳のとき九州大宰府に左遷され、京都を発ち、大和（河内土師の里）の伯母覚寿禅尼にいとまごいに立ち寄ったことがありました。そのとき、伯母に請われて自作の菅公坐像が、伯母に預けられていました。年月ははるかに過ぎ、江戸文禄（一五九二（五年）の頃に、その「菅公坐像（三寸八分）」が、三田樹木谷の「花城天満宮」に持ち込まれて、本地十一面観音の腹の中に、納められ祭られるようになったのです。不思議な光を放つという「菅公坐像（三寸八分）」の江戸への搬送は、お上の許しを得ての所業です。

この話が江戸古文書『御府内寺社備考』（名著出版）の中に残されていたのです。別の記録では、江戸期のこの「松久寺」は、門前に月の二十五日に市が立って大変にぎわった神社とあります。脇の坂道は「神社坂」と呼ばれ、坂は今も残っています。まあ、それほどでもない日本橋からは郊外でもあるし、江戸の名所として浮世絵になるまでにはなっていないかったものと思います。確かに、『江戸名所図会』に「花城天満宮」として描



④『江戸名所図会』より。「松久寺花城天満宮」の隣には「光台院」「源昌寺」「覚林寺」があり、いずれも現存している。



③三田樹木谷（港区）にあった「松久寺」境内の「花城天満宮」。奥に松久寺の屋根が見える。

かれています。〔図③④〕

「花城天満宮」の「花」は梅の花です、「城」は江戸城のことです。「天満宮」は菅原道真の名を忘れるわけにはいきません、東風吹かばにほひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな。今の鎌倉にある「松久寺」の家紋は、菅原家の家紋と同じ梅の花です。室町の晩期戦国武将の道灌によって花開く関東の文芸・数奇文化は、禅と天神信仰に重なって確実に後の江戸町人の文化に受け継がれ、江戸代々をつなぐ一つの照射線が「松久寺」だったことになるのです。〔写真⑤〕



⑤「松久寺」は現在鎌倉浄明寺町にある。

戦国武将の怨念が、江戸庶民を巻き込んだ「粹」の流れに変容していく一つの具体をしめたとおもいますが、平安時代の学問の神様の祟りを含んだ悲劇は、江戸盛況の元禄を経て人形浄瑠璃から歌舞伎の十八番『菅原伝授手習鑑』（延享三年一七四六年）となってよみがえっています（有名な十八番仮名手本忠臣蔵はその二年後が初演です）。日本人の心性に触れる「粹で成り立つ芸能歌舞伎」は、江戸時代において確実に地歩を築いていたのです。

三、慶長八年一六〇三年、征夷大将軍徳川家康、江戸城に入る

江戸開府の十三年ほど前に、徳川家康は秀吉に小田原北条を討伐（天正十八年一五九〇年）した褒美に、太田道灌が残っていた関東に国替え（移封）を命じられていました。したがって、十三年後の江戸開府までの間、江戸城は変化していませんが、その歴史は、はなはだ不明な点が多いのです。私はしきりに図書館通いをするのですが、なかなか幻視するまでにいたらないのです。古地図を手繰り寄せ

ては、その前後の変容振りを知らうとするのですが、古い江戸を幻視するには、風や地形の高い低い、溝や崖の跡の変形振りを目視して、残された石碑等を手がかりに歴史を追うしかないのです。まずは、その地に立ってみるのが一番でした。

徳川幕府開府以後に整備されていった江戸城の北の丸公園を、なめるように歩き見た後、私は、文明十年一四七八年に道灌が城内に父親も手伝って造った「川越城」に倣って造っていた天神社が、徳川の代になって堀の外に出されたという「平河天満宮」の現在の所在を求めて、桜田門をくぐって堀端に沿って麹町方面

に上っていきました。

秀吉時代の関東の支配者として江戸城に入った徳川家康が、初めて太田道灌の江戸城を見て菅原道真を祭った平河天満宮があるのを知って「太田道灌らしいねえ」と為政者としてそのゆき届いた人心把握力をたたえたというエピソードが残っています。

太田道灌は、江戸で最も高い切り立った丘を、最強の城を建設する地として武蔵野の台地の先端の紅葉山を選びました。品川沖から船で何度も江戸周辺を回り、湯島台地、上野台地、駿河台台地（神田山あり）を候補にして吟味の末、一番高い麹町紅葉山台地を選んだと言われています。もっとも、かつて秩父平氏の一族である江戸氏が、同じところを山城にしていた歴史があり、道灌はその後金になったにすぎないという説もあります。結局、この立地が関東一円を視野に入れた拔群の地だったわけです。ちょうど首都だった鎌倉と川越の中間点であるこの平川周辺は、後に徳川幕府になって開城されると、一大土木工事が始まって、大阪城以上の国の中心都市として、谷を削り、池や湿地帯を埋めて、運河を造り江戸百万都市を目指した世界一の都市になっていくのです。

現在、太田道灌が麹町貝塚に創建した「青松寺」のあった場所は「貝塚」という地名を残す立て札が立っており、「平河天満宮」も、麹町台地の坂道の中にありました。今ではいたるところがコンクリートのビル街になっていますから、かつての急勾配の坂も、大きな道に削り直してあって、そこが崖だったとは気づきませんが、東京では一番高い丘の上に開かれた街だったことには違いがないところでした。

四、明暦の大火が、江戸城下を循環型人工都市に変えた

江戸城のシンボルであり、石垣の下から金の鯨までが五十一メートルもあった日本一の大天守閣が、炎上したまま、再建されることが無かったというその明暦の大火事が、大変に気になります。火付け犯人をめぐる話は、謎めいた話が残っています。その大火の概要は次のようなものでした。『江戸の災害と復興——天下大變』（江戸文化歴史検定協会編集）を参考に、この火事の概要を押さえておいてから時代背景に踏み込んでみましょう。『明暦の大火は3回にわたり出火した。第1の本妙寺の出火では、湯島・神田を

なめつくし、日本橋・茅場町・八丁堀へ広がり、南は木挽町で焼け止まった。第2の小石川の新鷹匠町からの出火では、江戸城の北側の武家屋敷一帯を、さらに江戸城の天守・本丸などを焼き、大名小路から京橋方面を焼き、海へ至って焼け止まった。第3の麴町から出火は虎ノ門・桜田・愛宕下・芝口を焼土と化した。これにより江戸の町は六割が焼失した。

第3の出火が麴町の山王神社近くとなっていますが、この山王神社は、現在赤坂にある日枝神社のことで、江戸城内に太田道灌が天神様とは別に、建てていた地霊の神社（築土明神）のことです。実は、太田道灌は城内に三つの神社を建てていたこととなります。その第3の地霊の神社は「荒神宮」（別名「築土明神」というもので、地霊の荒神様とは出雲のスサノヲではなかったかと思われれますが、江戸期に他の二つと同じ時期に、牛込のほうに移されています。

で、明暦の大火事では、火付け犯人として、二十人の浪人が処刑されているのですが、真犯人は別にいるという噂は広がるばかりだったようです。第1の出火場所が本郷の丸山本妙寺ですが、このお寺では、自殺した娘が着ていた振袖を祈禱して火にくべると、風が吹きこんで燃

え広がって火元になったという話です。明暦の火事が「振袖火事」とも言われているのは、それ故のことです。しかし、終始消えない噂というのがあるのです。火付け真犯人は、妙法寺の「お咎めなし」ということも重なって「幕府だ」という者がいたのです。穏やかではないこの噂には、当時の政治情勢があったのです。そのころ江戸にあふれていた不平浪人を一網打尽にしようとした幕府の荒治療だったとするのがその噂の根拠です。なぜだろうということですが、この大火事の後、新都市計画の青写真がたちまちのうちに出来上がっており、江戸城と周辺の改築が極めて抜本的に成されているのが何よりの証拠だということです。

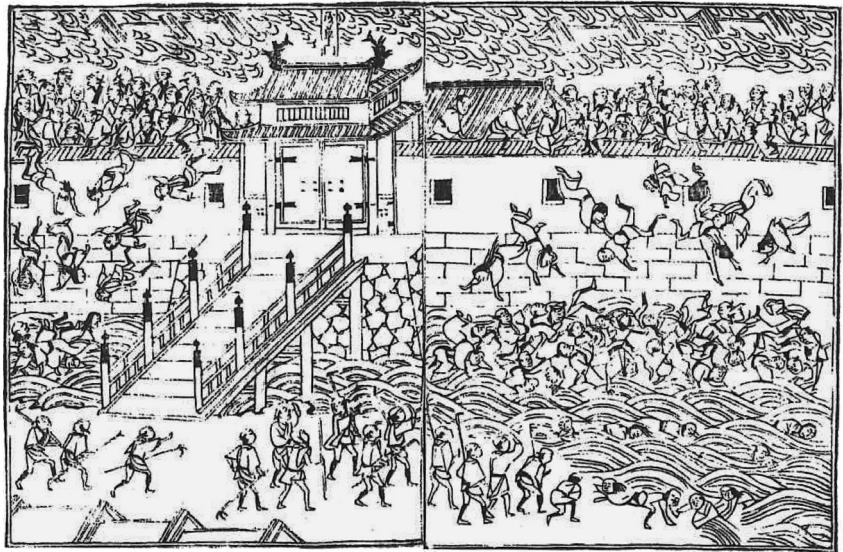
五、浪人狩りに手を焼いた幕府の窮余の一策説

江戸幕府開闢以来、江戸の町政は、試行錯誤による混乱が続いていて、身分制に沿った円滑な行政は、困難が多く、なかなかすぐには整っていかなかったのです。大きな障害となっていたのは、戦国時代が終わって、平和産業に移行しなければならぬのに、吸収合併や合理化による藩の「改易」（取り潰し）による首切

りだけでは、浪人は江戸の町に膨れるばかりです。江戸開府時は、腕力を使って生きてきた戦国時代の荒くれ戦士であふれるようになったのです。しばらくは、足軽たちによって、道路作りや運河作りの土木仕事がありましたから、戦場での武士の城作りの延長で、土木仕事をやったのですが、いつまでも公共投資の土木仕事があり続けるわけではありません。意識転換が必要だったのです。城盗り戦争はもう無い平和な時代が訪れていたのです。ですから、仕官の口を失ったかつての戦士と軍属は、浪人（浪士）となり生きんがために狼藉を働いてでも、その日暮らしを送るしかなくなっていくのです。幕府は取り潰しにあった元武士による反抗を恐れて、禁制札を矢継ぎ早に出して、反抗の芽をつぶしかかります。悪所が次々に出来て、博打が流行り、闇社会が膨れあがっていきます。それにつられて非合法をやらせる悪徳商人もまた生まれます。ついに、世直しをと叫ぶ、不平浪人が結集して幕府攻撃の乱を起こします。慶安四年一六五一年、江戸幕府が出来てちょうど半世紀、由井正雪・丸橋忠弥による倒幕計画「慶安事件」が発生するのです。

不穏な江戸の街では、鬻體や閻魔大王や墓所の絵を染め上げた着物が流行し、

目をむき口を開いて、体を奇妙に折り曲げて踊る「柴垣節」が不気味な音を出して繁華街を練り歩くそんな世相になっていきます。付け火犯人の中には、丸橋忠弥の残党がいたからと浪人たちの仕業ということになって処刑されても、火元の「丸山本妙寺」は、何にもお咎めなしどころか、後には寺の序列が上げられての幕府御用の日蓮宗です（別の日蓮宗派には不受不施派があつて、これは反対にキリシタンのごとく大弾圧されています）。明暦の大火事の翌日のこと、幕府は、幕府が転覆したという噂が立つといけなからと、早馬を飛ばして全国に將軍安泰を知らせています。復興計画の指揮をとる老中松平信綱は、関東一円の天守閣が焼けたが心配はいらぬ、持ち場を離れず、耕作に励めよと触れを出しています。幕府が示したかったことは、戦国時代では城盗りの象徴だった天守閣だったが、もはや無用の長物であり、世は天下泰平なのだから天守閣は造らないと宣言してのことだったのです。



⑥浅井了意『むさしあぶみ』より。浅草門の大惨事
浅草門が閉じられたため三方から炎に追い詰められて死んだ人は二万三千人に上ったとされる。

明暦の大火事の時、開かずの浅草門で焼死多数が出た話は、特に残忍です。

【図⑥】

そこだけで二万三千人が焼死しているところなのです（出典は浅井了意の『むさしあぶみ』）。この明暦の大火の死数は

全部で十万人を超えたと言われており、街の六割を焼失しています。まさに焼け野原の江戸になったのです。そこで四代將軍家綱（慶安四年一六五一〜延宝八年一六八〇）は、矢継ぎ早に都市大改造の新政策を打ち出していきます。実は、移転計画自体は焼失する前からあったのです。例えば、日本橋界隈の岡場所としての吉原遊郭（葦の林に点在していたのが語源）は、新天地の浅草郊外に区画整理された美しい町に移されていくのです。移った先の吉原遊郭は、次第に幕府をささえる体制文化といったものになっていくことになるのです。これは、あくまでも新都市計画があつてのことであり、その一例にすぎないのです。寺町の整理から、紙敷き製造場から、大工町から芝居まち、魚河岸から米蔵から、日常生活が円滑に営まれるように各業種別市場を作りながら都市づくりが進められていくのです。これらのことは、身分による仕事仕分けが伴って出来上がっていくのです。江戸時代を身分制度が確立された封建時代として評価できないとする人もいますが、見落としてならないのは、役割分業化することで都市として全体の総合機能を補完し合った循環型の街づくりになっているということなのです。（つづく）

俳句の縁

大内善一（誌友）

中学まで、福島県二本松市在の岩代町という、かつての伊達輝宗の城下町で育ち、昭和22年中学時代、町御出身の「草茎」（現在はくさくきと改名）主宰宇田零雨先生が来訪され「草茎二本松支部」が誕生し、中学時代の国語の大内貞先生にさそわれて初句会に参加したのが俳句入門であった。

宇田先生は、慶應義塾大学で教鞭をとられ、京都大学で芭蕉の研究で文学博士号の称号を取得された方である。

その後宇田先生の御推挙により、「草茎」の同人であられた今泉宇涯先生が経営する市川医院の書生として働きながら、都立第三高等学校夜間部（現両国高校）に進学させていただいた。

今泉先生は宇田先生の高弟で、後に「日本連句協会」が発足した際、初代会長に選任され、連句の復興に努められた方である。

「草茎」の句会・連句会にはいつも、今泉先生のお供をし参加させていただいた。会終了後、いつも反省会と称し、宴会が開かれ、宇田先生の御母堂様の御指導でお燗番を務めさせていただいた。御母堂様は二本松藩士の御息女であられ、きびしく作業や躰を教わったことが今日役に立っている。

戦後とぼしい生活の中、どこから泉のように酒があったのか、そのお燗番を、零雨先生の御母堂様の御指導をいただき、一升瓶の酒を薬缶にそそぎ焔炉にかけ、燗が付いたら徳利に入れ、それを配る役だったが、なかなか忙しいことであった。ある年の忘年句会終了後、いつもの大宴会となり、後に日展会長を務められた日本画の巨匠大山忠作画伯に「お燗番合格」といわれ、その年は「寅年」であったため即興で「虎」の絵を描いていたのだ。掛軸に仕立て大事に床に飾っていた。

たところ、友人が家を新築した折、お祝に差し上げ喜んでいただいた。

成田山新勝寺光輪閣の襖絵、大山画伯の世紀に残るといわれる「日月春秋」と題する三十八面の作品は見事なものである。

大山画伯の俳句を紹介致します。

蛙の目賢愚二相を備えたり

梅雨の圈今日はっきりと離りけり

郭公に野の静けさやでこ屋敷

黄水仙黄に咲くはかはなし哀し

喪服きて古里の嶺おるかみぬ

ふる里に鳥帰る日のきよめ塩

東北本線二本松駅近くに大山忠作美術館が建立されている。

御令嬢の采子さんは、画伯同様酒豪で、現在もテレビ、舞台で活躍している女優さんである。

数年前、新潟県出雲崎に良寛逸話出雲崎油絵館が開館され、その記念館の看板を大山画伯が依頼され揮毫することとなっていたが、急逝され適わなかったため、采子さんが代りにと、大山画伯が大切にしていた、木彫の「良寛像」を寄贈された、その際、雪の中同行し現地の宿で「良寛像」に別れの宴をしたことがなつかしく思い出されたことである。



編・訳 上松玲子

取締りの根拠は

「今日頭条」「快手」など急成長した情報配信プラットフォームが集中的に当局の監視や取締りを受け、罰金、削除、永久閉鎖などになっている。

昨年6月1日に施行された「中華人民共和国ネットワーク安全法」では、個人および団体がネットを利用して国家の安全を脅かす行為、テロ、暴力、わいせつな内容の伝播、他人の名誉を傷つける行為に及ぶことが禁止されている。

中国政法大学情報伝達研究センターの朱副主はネットワーク安全法について、抽象的過ぎると指摘する。例えば、頻繁に処分の理由になる「低俗」という表現だが、「低俗」の定義が法律上も明確になされていないのだ。わいせつ、有害などは判断できるが、低俗というのは断定しにくい。

取締りの対象になるかどうかの基準の一つは親たちの拒否反応にある。例えば子どもたちに真似てほしくない動画制作集団がある。富を誇示し、闇社会との関わりも匂わすもので、違法ではないが青少年のアイドルとしては不健康といえる。親の評判はすこぶる悪い。批判的な世論が形成され、保護者からの苦情、通報が多くなれば、基準はなくとも当局は懲罰に乗り出す。

しかし、そのような世論が形成されやすいのは中型以上の都市のみで、農村にはそうした低俗動画のヘビーユーザーが多く存在し、製作者側も、それを知っている。つまり、見る人次第なのだ。

取材を通じ、本当の意味で「低俗」を駆逐するためにはインターネットのコンテンツについて統一基準による等級制度を作るべきだという声が多く聞かれた。

『南方週末』2018年4月19日

路上演奏のイメージアップ

今年3月四川省成都市の文化広電新聞出版局は市内の30か所を暫定的に路上演奏、路上演奏の許可地点と定め、選抜後許可証を取得した者にのみ演技、演奏を許可すると発表した。選抜に当たった担当者によれば、出演料は払われないが、場所代は無料で、観客から携帯の電子決済で任意の鑑賞料を集める仕組みという。

成都市音楽産業弁公室によれば、最近は無許可の路上演奏に対して都市管理部門の取締りが強化されたため、多くの芸人、演奏家は場所をあちこち変えて出没するようになったという。

ゲリラパフォーマーの大多数はギターの弾き語りだ。その一人高さんが言うには、外国での路上演奏は芸術だが、中国ではプロの音楽家が路上に出ることはなく、中国での路上演奏には勇気がいるという。

今回選抜された中国民族楽器の古琴演奏家の黄さんは「以前は考えたこともなかったが、諸外国と同様、音楽ホールを飛び出して街角で市民に民族楽器を楽しんでもらうのは難しいことじゃない」と、好感触を示している。

『成都商報』2018年4月23日

紙の高騰で

紙の値上がりは近年図書業界で話題になっていたが、このところ、いよいよ図書の定価の改定を迫られるまでになり、出版社は頭を痛めている。2016年までは紙の価格は安定しており、図書に占める紙のコストは50%前後であったが、2017年以降は60%以上になったと、

北京聯合出版公司の劉副編集長。譯林出版社制作部の王主任も、教材への影響は大きいと述べた。

長い目で見れば、中小企業の方が影響はより深刻だ。大手はど価格交渉力がないからだ。仮に民間の出版社が業界から手を引くということになれば、それは図書市場にとって赤信号を意味する。業界保護のため新刊本からは割引制限を設定するべきだと、業界は呼び掛けている。

特に大手のネット通販は販促経費の全てを出版社に負わせているため、出版社は利益がほとんどないのだそうだ。

値上がりで読者の購買意欲に陰りが出るかもしれない。その後また需要を取り戻せるかは現在判断できないと、劉副編集長。おそらく活字の電子化が進み、紙の図書は芸術的価値、收藏価値のある物としての側面が強調されていくだろうという見方もある。

〔北京日報〕2018年5月9日

看護師のシェア

福建省福州市の郊外に住む李さんは携帯のアプリで二人の看護師を呼んだ。サービス料と交通費合わせ200元足らずの料金で、病院で並ぶこともなく、家族に付き添いを頼まずともケアが受けられたと大満足だ。李さんは直腸がんで装具の定期的な交換が必要なのだ。

インターネットの普及により「共享」（シェア）という名の訪問診療サービスが勃興し、盛んになっている。2016年に「金牌看護師」というアプリを開発した企業が設立され、注射

や点滴、採血、包帯の交換、浣腸、痰の除去、鼻腔栄養など10項目のサービスの始めた。初めはタクシーアプリと同様、利用者の予約希望に各登録看護師が答える形だったが、後にサービスの質を確保するためにシステムが一括手配する形となった。

現在看護シェアアプリは医療サービスに特化したもの、複合型のものを合わせ20近くある。

李さんによれば、どれも大差なく、利用法も簡単だという。身分証明書番号など個人情報を入力して会員登録し、症状に応じて必要としている処置を選択する。例えばまず、産後ケア、術後ケア、口腔ケアの中から選び、その後さらに具体的な処置項目を選ぶ。時間とコースを選び、具体的な要求を書き込む。処方箋など病院診療証明をアップロードすれば予約完了だ。

料金も高額ではなく、大多数の利用者が歓迎している。利用者だけでなく介護にあたる家族からも、大いに助かる、専門職で安心だ、と好評だ。

看護師にとっても自分の専門が生かせる上、副収入が得られると、登録者は324万人にも上る。看護師の離職理由の48・8%が低賃金であることが示すように看護師の賃金水準は良いとは言えないのだ。

医療サービスアプリ「医護到家」が公開した2016年の利用実績によると、登録看護師は3万2千名、利用登録者3万名

で、利用回数は10数万回という。利用額は北京と上海での利用が半数を占め、中でも北京は38%と、高齢化と現代化が進む都市での利用が中心となっていることがわかる。

一方、看護師シェアアプリは両刃の剣だという業界内の声もある。特に術後ケアの患者の場合、不測の事態も起きかねない。また、登録看護師の少ないアプリや、登録者が在学中も含め経験の浅い看護師ばかりというアプリもある。登録看護師側からも二人訪問体制が望ましいという声が上がっている。

福建省看護学会の鄭秘書長によれば、業界として基準もなく、リスク対策や、リスク回避制度が整っていないという。このことが、利用者、看護師双方にとつての不安材料であることは否めない。

〔工人日報〕2018年5月13日

コラム

《腰折れ文》 十二、

渡邊澄子（会員）

近年の大事件と言ったら米朝首脳会談に決まりだろう。事前にジグザグはあったが、まずは米朝融和の機運が生まれたことは喜ばしい。だが、朝鮮戦争終結問題は未解決のまま。世論は歴史的会談の成果に冷ややかだ。新聞等から得る情報による両首脳の人柄は好きになれず、信頼性にも欠けるので私も「世論」派だ。でも、米韓合同軍事演習は中止され、核開発は中止されたらしいから実りはあったといえるだろう。

このチャンスで日本は活かせるのか。安倍氏は、北の非核化費用の負担に加えて、会談が額面通りなら、必要ないはずの二千億円以上もする「イージス

艦」を米国から買うことになるのだろうか。「働けど、働けど」生活困窮の自国民より、経済問題が第一のトランプ氏のポチで在り続ける方が大事なのだろうか。金喰い虫の駐留米軍を韓国から撤退させるらしいが、米軍専用施設を七割以上も七十年にもわたって押しつけられ、絶え間なく派生する事件・事故・騒音はじめ自然・環境破壊の沖縄の現状をなくすことが先決だろう。日米の為政者は、せめて一か月だけでも沖縄で生活してみるのがいい。体験したら、「ひとごと」意識が変わるのではないだろうか。

六月二十三日は、二十万人超の命を奪った地上戦から七十三年目を迎えた「沖縄慰霊の日」

だった。『琉球新報』が連日伝え、教えてくれる沖縄戦の阿鼻叫喚は想像力も届かぬもどかしさで苦しい。平和祈念公園で営まれた「沖縄全戦没者追悼式」で、翁長知事は、米軍普天間飛行場の名護市辺野古移設阻止を貫く強い覚悟を闡明された。が、翁を手術されて療養中とのことだが、少しは白いのが混じっていてもまだ黒々としていた毛髪が短く真っ白になっていて胸をつかれたが、背筋をしゃんと伸ばして気魄少しも衰えぬように見え、涙ぐまれた。米朝首脳の会談をとり上げて、朝鮮半島の非核化や平和体制の構築に向けて緊張緩和の動きが見られ出した「流れに逆行する」辺野古移設は断じて許せないと力強く主張された。翁長知事健康完全回復を願い、辺野古基地反対運動達成に微力を尽くしたい。

この日、世界文学会で李恢成についての講演をした。在日一

世と二世、さらに三世・四世では人生が全く異なる。李恢成は一九三五年、樺太の真岡（現ホルムスク）生まれの二世である。本協会企画の樺太旅行に参加した時の衝撃は忘れられない。大日本帝国の植民地時代の彼は日本人以上に「皇国少年」になるために努力し、創氏改名した日本人として生きながら、藤村の『破戒』の丑松の苦悩に苦悩し続け、終戦でソ連軍とGHQに振り回され、大学卒業は二十六歳時。戦時下の「天皇制ファシズム」から戦後の民主主義への急変に戸惑うなかで朝鮮戦争による国土二分で、父母の出身地が南北に分かれるため帰国不能になる。外国人芥川賞受賞者は李恢成が初めてだが、彼の文学の心髄は「北も南もわが祖国」と「土着の社会主義」だろう。在日二世の苛酷なパルチャ（運命）が彼を優れた作家にしている。世界文学会から李恢成論を依頼されてしまった。

陶々俳壇

選後評

馬場由紀子

子規と漱石の交友

長野宏太郎

兼題「ラベンダー」「信」
席題「雨」

○五月雨や日暮れて遠き里の径 岡和水

○戯れる蟹の横這ひ浜動く（宏太）（由紀子）

○麦の秋引き込み線のレール錆び 戸部まもる

☆○富良野の丘斜めに香るラベンダー（紅杓）

草に埋もれてどくだみの自己主張（和水）長野宏太
冷奴よくぞ日本に生まれける

紫陽花やまた来年を信じつつ 上野京

吾が庭の百花繚乱五月晴れ

○そこだけはどくだみ抜かず庚申塚 鈴木南山

信濃路の野仏笑まふ青田風

○五月雨の三島神社やうなぎ重 橋本紅杓

○桃色を深めてをりぬ皐月垣

○ラベンダー夏の光に香をのせて 佐藤若杉

五月雨や信を失ふ国の長（京）

寝ぬるまで旅の団扇を弄ぶ 馬場由紀子

雨上がる枇杷の産毛を光らせて（まもる）

☆最高点 ○由紀子選 （一）各特選

紫陽花のたくましき欲し八十路にも 京

作者の庭にはこの時期になると、紫陽花が次々と咲き出す。あまりにも繁りすぎるので刈り込んでみるものの、次の年にはまた勢力を盛り返すのだそうだ。八十路の作者は紫陽花に力を貰っている。

兄の忌や香り野に満つラベンダー 南山

ラベンダーが野を埋める頃お兄様が亡くなった。ラベンダーの香りとお兄様の思い出は、いつの頃かセットになつてしまったようだ。北海道出身の作者らしいラベンダーの供花である。

色変はる車窓に青田流れけり 紅杓

大陸から引き揚げてきた少年時代。門司から東京へ特急電車に乗っていると、日本の夏の景色が徐々に色づき、車窓を流れて行く。取り分け初めて見る青田のことは半世紀以上過ぎた今でもしっかりと覚えていらつしやるとのこと。

太陽の光を糧に薔薇の苑 若杉

薔薇の花が日に映え、華麗に咲き満ちている。薔薇の姿の美しさと香りは、洋の東西を問わず人を惹きつけてやまない。最近では鑑賞するだけでなく薔薇のジャムやフットクリームなどなど、味覚でも楽しませてくれる。

挨拶はいいつも許可局ほととぎす まもる

今年もまたホトトギスが鳴き出した。毎年思うのだが、何故「許可局」と聞かえるのだろうか。そんなことを思いながら今年のホトトギスの声を作者は楽しんでいらつしやる。

街路樹の顔いきいきと走り梅雨 宏太

都会という砂漠の樹木はどこか疲れているようで、勢いを感じさせてくれない。しかし、この時期の雨に少しは息を吹き返したように思える。都会的な一句である。

少年に戻りし旅や昼寝覚 和水

お昼寝の夢の中で作者は少年に返っている。子どもの頃の思い出は、全てがキラキラとして人生の宝物だ。哀しみも喜びも全てを語り、更に今を明るく生きて行く。

子規と漱石の交友期間は、10年余りの短いものでしたが、二人の深い友情は、いつまでも後世に受け継がれています。

明治25年、子規は文科大学卒業を断念して日本新聞社に入社。俳句革新のために大活躍。

明治28年、日清戦争従軍記者志願。帰国途中に咯血し神戸病院に入院。明治28年4月から松山中学教師として赴任していた漱石は、子規を自分の下宿に同居させました。

桔梗活けてしばらく仮の書齋哉 子規

漱石は、子規の句会や吟行にも頻繁に参加し俳句に親しんでいました。やがて小康を得て東京に戻る子規は漱石に

行く我にとゞまる汝に秋二つ 子規

一方、漱石の送句は、東京で療養生活に入つた子規に俳句の添削をこつ形で続けましたが、本当は無聊を慰めるためと言われています。

明治33年、漱石は2年間のロンドン留学に行くことになりました。

萩すゝき来年あはむさりながら 子規

秋の雨荷物ぬらすな風引くな 子規

秋風の一人を吹くや海の上 漱石

明治35年9月子規の逝去を漱石は2か月後に日本からの手紙で知りました。ロンドンで詠んだ子規への追悼句の一つ

霧黄なる市に動くや影法師 漱石

カホ会通信

◆「会員懇談会」 7月6日開催

「会員懇談会」は、第7回定時社員総会では十分に説明が出来なかったことを反省し、またその後一部会員からの執行部に寄せられた質問等に鑑み、開催しました。参加者は35名。

最初に会長が挨拶し、今後の方針として、①善隣中国塾を9月に再開、②古海前会長による昭和史(含む満州)塾も9月に立ち上げる、③学術顧問による講演会の開催に力を入れる等を述べました。

また、用意した「会員懇談会資料」に基づき、執行部があらかじめ寄せられた質問に対し回答する形でスタートしました。

特に、①今年度の三つの重点施策の意義、②会議費、旅費交通費等の経費に関する見解、③役員の80歳定年に関する質疑等では活発な意見交換となりました。

た。

会員の意見の中には、「執行部の仕事の進め方には、かなり強引なところもあり、反省すべきだ」との厳しいご指摘もありました。

最後に、古海建一氏から、「人の考え方にはいろいろな観点があるから意見の一致が難しいこともある。そうであっても、協会の健全な運営には理事会と委員会、常務会、会員との十分な意思疎通に努めることが重要。こういう集まりを今後も折を見てやって頂きたい」というコメントがあり、充実した2時間の懇談会は終了しました。

(事務局長 藤沼弘一)

同好会だより

〈一石会〉

6月囲碁例会優勝 岡 和良氏

〈謡曲会〉

8月の例会はお休みです。

みんなの写真館

「神幸祭」の行列 (表紙)

6月8日金曜日午後3時頃、赤坂山王日枝神社の「神幸祭」の行列が、当国際善隣会館の前を練り歩きました。

これは江戸時代から続く「祭礼行列」で、総勢500人、まさに現代の王朝絵巻でした。この山王祭は京都の祇園祭、大阪の天神祭と共に日本三大祭りに数えられています。ここ新橋一丁目は古くからの氏子として、休憩時に食べ物、飲み物の提供など同じ町内会の仲間がお手伝いをしています。それにしても朝7時半に赤坂を出発して、皇居を始め都内を練り歩き、夕刻5時前に還りつくまでのボランティアの皆様には、頭が下がります。

(藤沼弘一)

春のフナ釣り・悦楽老人日記 (表4上)

今年も利根川支流のフナ釣りに行った。写真の手前は瀬戸師匠、奥は絵本仲間の山田さん。二人はやる気満々だが私はハナから遊び半

分。のんびりとした景色。田植えも済んで人っ子一人いない。「一生幸せでいたいなら釣りを覚えなさい」と中国の諺を教えてくれるのは山田さん。25センチをバシバシと釣り上げるのは瀬戸師匠。「すげえなあ」と言いながら「ビール飲もうかなあ」とだらしないのは私だ。フナは泥臭くて食えないのが残念だということ。「佐原でウナギ食って帰る?」という瀬戸師匠に同意し、三九〇〇円の思わぬ出費の日。

(森 淳)

尾瀬の水芭蕉 (表4下)

尾瀬は、福島県、新潟県、群馬県の3県にまたがる高地にある国内最大の湿原である国立公園です。水芭蕉はこの標高1400mの尾瀬ヶ原にある代表的な花です。純白の苞をまとう清楚で愛らしい姿が日本人だけではなく、外国人観光客も引き寄せている。通常は6月上旬が見ごろですが、今年は5月下旬頃から咲き始めた。平年より一週間前倒し尾瀬を訪ねて、無事にカメラに収めることができました。(姜 晋如)

2018年8月の行事予定

- 1日（水） 俳句会（全員5句投句として、句会は休会）
兼題「桐一葉、薄」及び当季雑詠
- 2日（木） 14：00 ○公開フォーラム
「日大アメフト問題から見えてくるもの」
長沼宗昭氏（前日本大学法学部教授、日本大学文理学部大学院非常勤講師）
- 3日（金） 11：00 一石会囲碁例会
- 21日（火） 14：00 謡曲会（松木先生稽古日）
- 31日（金） 16：30 「内蒙古自治区科学技術交流センター訪日団」との交流会
（参加希望の方は事前に事務局までお申込ください）

※8月13日（月）、14日（火）、15日（水）は、事務局は夏休みです。
ご注意ください。

8月の会議予定

- 2日（木） 16：00 講演委員会
2日（木） 16：00 広報委員会

※他の委員会等はお休みです。

※会員外一般聴講者の参加費は、◎印：1000円、○印：500円、無印：無料です。
※下線は通常日程に変更あり

みんなの 写真館



ISSN 0386-0345
二〇一八年（平成三十年）八月一日・毎月一日発行

「善隣」第四九四号（通巻七六一）

発行所

〒一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋一五五
一般社団法人 国際善隣協会
電話 〇三三五七三三〇五（番代表）

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)

<http://www.kokusaizenrin.com>